

リクルート「キャリアガイダンス」誌全国調査

「2006年 高校の進路指導に関する調査」報告書

小社では全国の国・公・私立高校の進路指導部を対象に、進路指導の実態についてアンケート調査を隔年で実施しています。2006年度調査では、進路指導の困難な現状や取り組み状況を明らかにしたほか、2004年に文部科学省から提言された「キャリア教育」について推進状況等も調査しました。その分析結果をまとめましたのでご報告申し上げます。

株式会社リクルート 進学カンパニー
カンパニー長 井上智生

TOPICS

I 進路指導の困難

■約9割が「難しい」。しかし過去に比べ困難さは緩和の傾向

進路指導を難しいと感じている先生は「非常に」「やや」を合わせて9割を超えた。しかし、「非常に難しい」は4年で23ポイントも減少しており、困難さは緩和傾向にある(p.4)

■「就職環境」よりも「入試の易化・多様化」が大きな問題に

困難の要因トップ3は生徒の「進路選択・決定能力の不足」、「入試の易化・多様化」、生徒の「学力低下」。景気回復の影響か、前回から「産業・労働・雇用環境」「高卒就職市場の状況」が激減した(p.5)

■高校生に「主体性」「目標達成意識」など意欲面の不足目立つ

進路を実現する際に自校の生徒に不足しているもののトップは「基礎学力」。次いで「主体性」「目標達成意識」といった意欲に基づく項目が多くあがった(p.8)

II 各校の取り組み

■大半の進路指導項目で実施率がアップ

進路指導の取り組みは、ほとんどの項目で前回の実施率を上回った。なかでも「就業体験」56%、「大学教授による模擬授業」51%などの伸びが目立つ(p.16)

III 学校経営計画の浸透度

■半数近くが数値目標を設定。内容は「国立大、有名大学への進学者」が最多

進路指導の数値目標を定めている学校は5割弱(p.20)。目標の内容で最も多かったのは「国立大、有名大学への進学者数(率)」で設定校の6割が掲げていた(p.21)

IV キャリア教育の状況

■キャリア教育先進校で高い「キャリア教育によって生徒の意欲・満足度が増す」

キャリア教育による変化について、「生徒の意欲が増す」「生徒の満足度が増す」は全体では4割台だが、キャリア教育先進校では6割を超えた(p.26)

V 教師のキャリア観

■キャリア教育推進で「自分自身のキャリアを考える機会が増えた」先生は約6割

キャリア教育を推進していくなかで、自分自身のキャリアを考える機会が「増えた」と回答した先生は全体で約6割。キャリア教育推進校に限定すると、7割近くへのぼった(p.29)

CONTENTS

ページ

調査概要・回答者プロフィール	3
I 進路指導の困難	
1. 進路指導の困難度 「非常に難しい・やや難しい」は9割以上	4
2. 困難の要因 「進路選択・決定能力の不足」が最多の65%	5
3. 困難の要因 <最大の要因> 生徒の問題が上位に集中	7
4. 高校生の問題点 「基礎学力」が最多の66%	8
フリーコメント① 生徒の問題でどのような困難が生じているか	9
5. 進路指導體制の問題点 「十分な時間を割けない」が最多の56%	10
フリーコメント② 学校の問題でどのような困難が生じているか	11
6. 進路環境の問題点 入試の易化が生徒の意欲や態度に影響	12
フリーコメント③ 進路環境の問題でどのような困難が生じているか	12
7. 保護者の問題点 経済的・精神的支えになっていない	13
フリーコメント④ 保護者の問題でどのような困難が生じているか	13
8. 今後の進路指導の見通し 「より困難になる」が約6割	14
フリーコメント⑤ 今後の進路指導はどうなるか	15
II 各校の取り組み	
9. 進路指導状況 <生徒対象～校内で完結～> ほとんどの項目で実施率がアップ	16
10. 進路指導状況 <生徒対象～外部・卒業生と連携～> 「オープンキャンパスへの参加指導」が93%	17
11. 進路指導状況 <保護者対象・教師対象> 「教師の校内研修」の実施率は46%	18
III 学校経営計画の浸透度	
12. 進路指導の経営計画策定状況 「定めている」は前回より12ポイント上昇し57%に	19
13. 進路指導の数値目標策定状況 「定めている」は45%、「定めていない」は51%とほぼ半々	20
14. 数値目標の内容と有効性 目標の内容は「国立大・有名大学への進学状況」が約6割	21
IV キャリア教育の状況	
15. キャリア教育の進捗状況 「キャリア教育の意味を生徒に伝えている」が約3割	22
16. キャリア教育への認識 「生徒にとって有意義」が最多の53%	24
17. キャリア教育の課題別困難度 「教員の時間確保が困難」が9割超で最大の課題	25
18. キャリア教育による変化 「進路指導の仕事が増す」「教員の仕事が増す」が7割超	26
フリーコメント⑥ キャリア教育の状況・意見	27
19. 専任キャリアカウンセラーの必要性 「必要」は46%、「不要」は23%	28
V 教師のキャリア観	
20. 教師自身のキャリアを考える機会 「とても増えた・増えた」は全体の約6割、推進校の約7割	29
21. 教師自身のキャリアについて考える内容 「力量不足について」が約6割	30
フリーコメント⑦ 自身のキャリアについてどのように考えているか	31

■ 調査概要 ■

- 調査対象 全国の全日制・単位制高校の進路指導主事
- 調査期間 2006年10月11日～25日
- 調査発送数 5,258
- 調査方法 郵送法
- 回収数 866
- 回収率 16.5%
- 有効回答数 813 (有効回答率15.5%)

■ 回答者プロフィール ■

- 設置者別 国立4校 (0.5%) 公立621校 (76.4%) 私立188校 (23.1%)
- 高校タイプ別

普通科単独校 425校 (52.3%)	総合学科単独校(移行中含む) 50校 (6.2%)
普通科中心で他学科併設 156校 (19.2%)	総合学科併設 10校 (1.2%)
工業を中心とする高校 68校 (8.4%)	商業を中心とする高校 46校 (5.7%)
家政を中心とする高校 4校 (0.5%)	農業を中心とする高校 26校 (3.2%)
その他 28校 (3.4%)	

※本文中の表記：普通科単独もしくは中心校＝普通科 総合学科単独もしくは併設校＝総合学科
工業・商業・家政・農業を中心とする高校＝専門高校

- 地域区分

北海道 60校 (7.4%)	東北 86校 (10.6%)	
関東・甲信越 243校 (29.9%)	東海・北陸 146校 (18.0%)	関西 96校 (11.8%)
中・四国 87校 (10.7%)	九州 95校 (11.7%)	

- 回答者校務分掌

進路指導主事 665人 (81.8%)	進路指導担当 122人 (15.0%)	
学年担任 37人 (4.6%)	学年主任 20人 (2.5%)	教頭(副校長) 2人 (0.2%)
その他 26人 (3.2%)	無回答 21人 (2.6%)	

- 回答者平均年齢

46.26歳

※キャリア教育とは

「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」。端的には「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」
(2004年1月 文部科学省「キャリア教育の推進に関する研究協力者会議」本報告が定義)

I 進路指導の困難

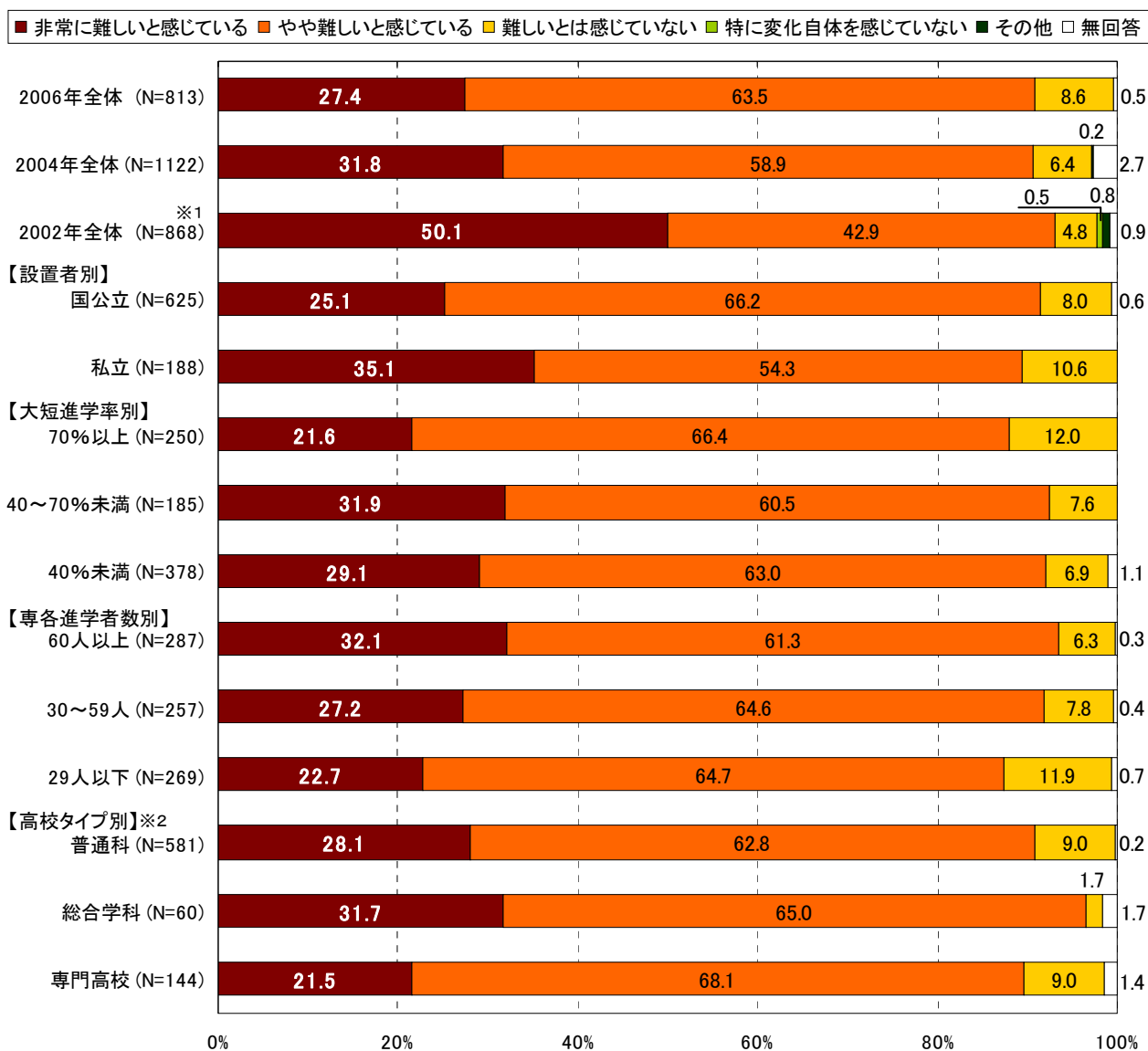
1. 進路指導の困難度

- 「非常に難しい」「やや難しい」は9割以上
- 「非常に難しい」が減少し、困難さは緩和の傾向

現在、進路指導を難しいと感じているかという質問に、進路指導主事が8割を占める回答者の27%が「非常に難しい」と回答した(図1)。「やや難しい」の64%と合わせると9割を超え、大多数が現状を難しいと感じている。しかし過去2回の調査結果と比べると「非常に難しい」は漸減しており、全体的に見れば困難さは緩和傾向にあると言えそうだ。

また、学校の属性によって困難さの認識に違いがあった。クロス集計で「非常に難しい」が多いのは、設置者別では私立、大短進学率別では[40~70%未満]の中程度校、専門学校進学者数別では[60人以上]の多数校、高校タイプでは総合学科だ。生徒の進路が多様な学校で、より困難度が高いという状況がうかがえる。

図1 現在、進路指導を難しいと感じているか



※1 2002年は「高校進路指導を推進する上での環境が大きく変化しています」と前置きして質問しており、04年、06年とは質問文が異なるため単純比較はできない

※2 高校タイプの分類 普通科=普通科単独校もしくは中心校、総合学科=総合学科単独もしくは併設校、専門高校=工業・商業・家政・農業を中心とする高校

2. 困難の要因

■「進路選択・決定能力の不足」が最多の65%

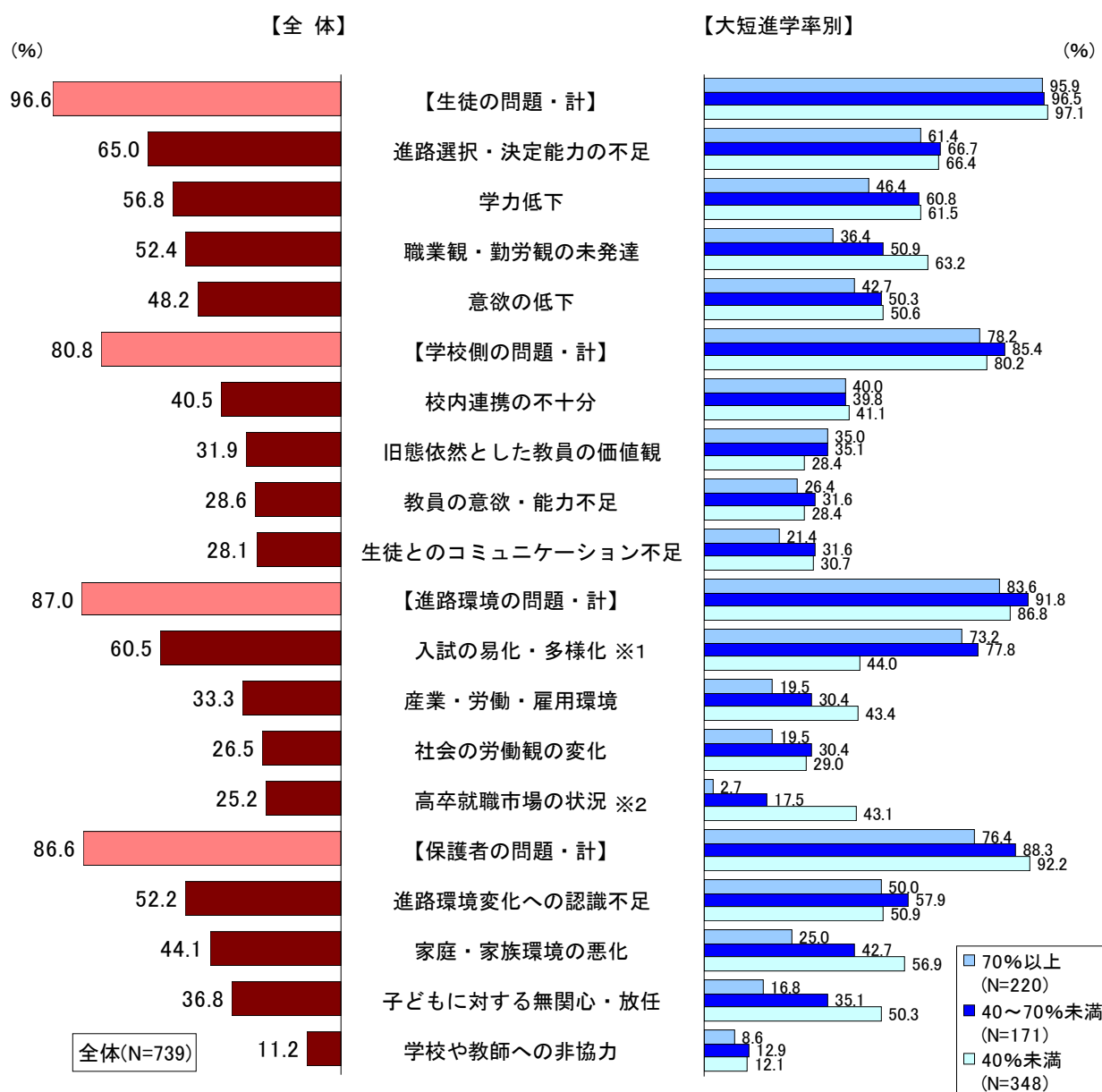
■就職や雇用環境より入試が大きな問題に

現在の進路指導を「非常に・やや難しい」と回答した人にその要因をすべてあげてもらったところ、最も多かったのは〈生徒〉の「進路選択・決定能力の不足」で65%が回答した(図2)。次に〈進路環境〉の「入試の易化・多様化」61%、〈生徒〉の「学力低下」57%が続く。大短進学率別では、〈生徒〉や〈保護者〉の各問題は進学率が低いほど回答が多い傾向が見られる。ちなみに専門学校進学者数別では、ほとんどの項目で、専門学校進学者数の多さに比例して回答が多くなっている。

前回と比べると、〈生徒〉では「学力低下」と「意欲の低下」、〈学校〉では「教員の意欲・能力不足」が増加した(図3)。〈進路環境〉では景気回復のためか「産業・労働・雇用環境」、「高卒就職市場の状況」が激減し、「入試の易化・多様化」(今回は「入試の易化」として質問)を大きく下回った。〈保護者〉では「家庭・家族環境の悪化」「子どもに対する無関心・放任」が増えた。

図2 進路指導を困難にしている要因は何か

(図1「非常に難しいと感じている」「やや難しいと感じている」の回答者のみ・複数回答)

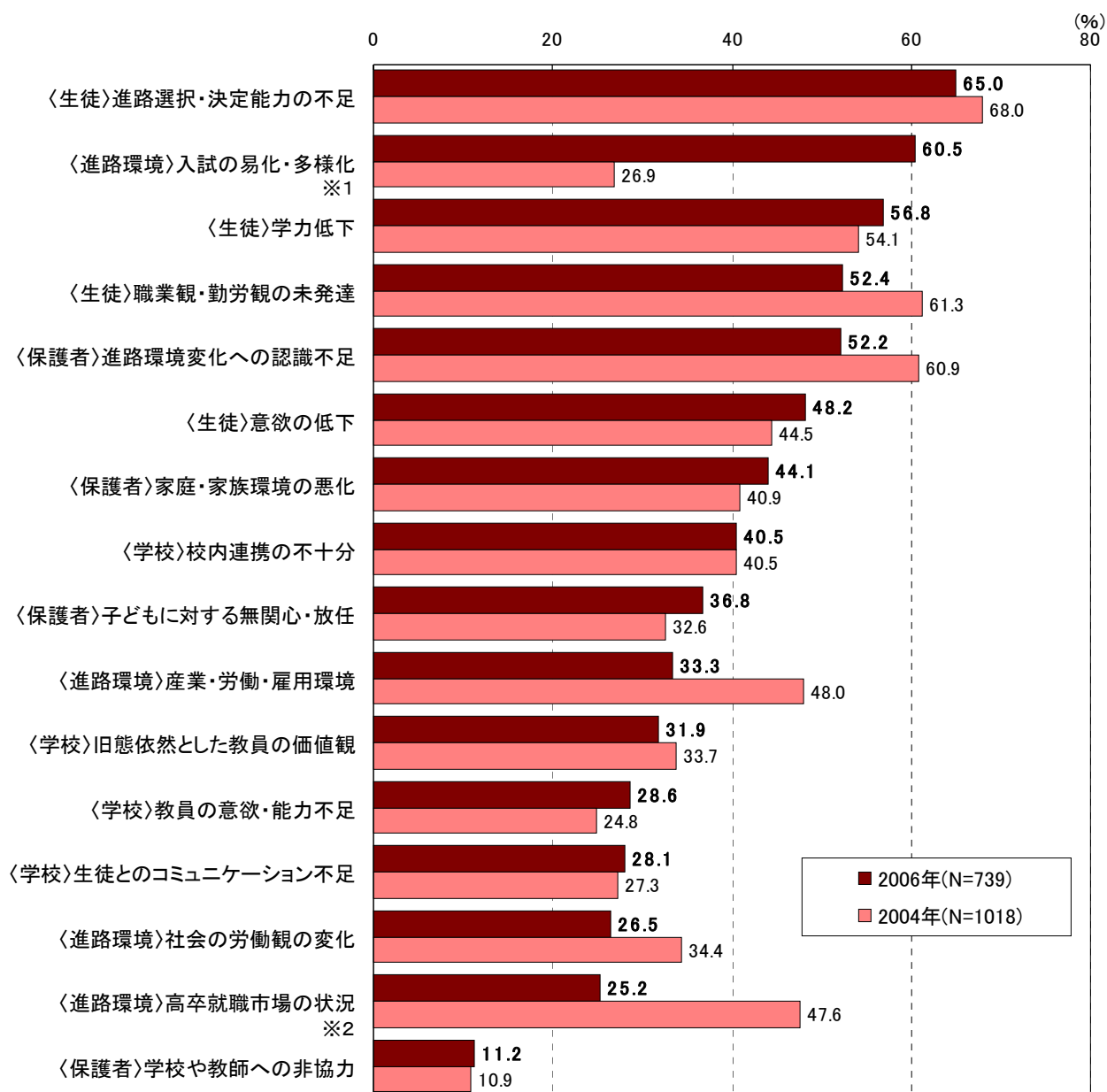


※1 2004年調査では「入試の易化」

※2 2004年調査では「高卒就職の市場縮小」

図3 進路指導を困難にしている要因は何か～前回結果との比較～

(2006年、2004年ともに進路指導を「非常に難しいと感じている」「やや難しいと感じている」の回答者のみ・複数回答)



※1 2004年調査では「入試の易化」

※2 2004年調査では「高卒就職の市場縮小」

3. 困難の要因<最大の要因>

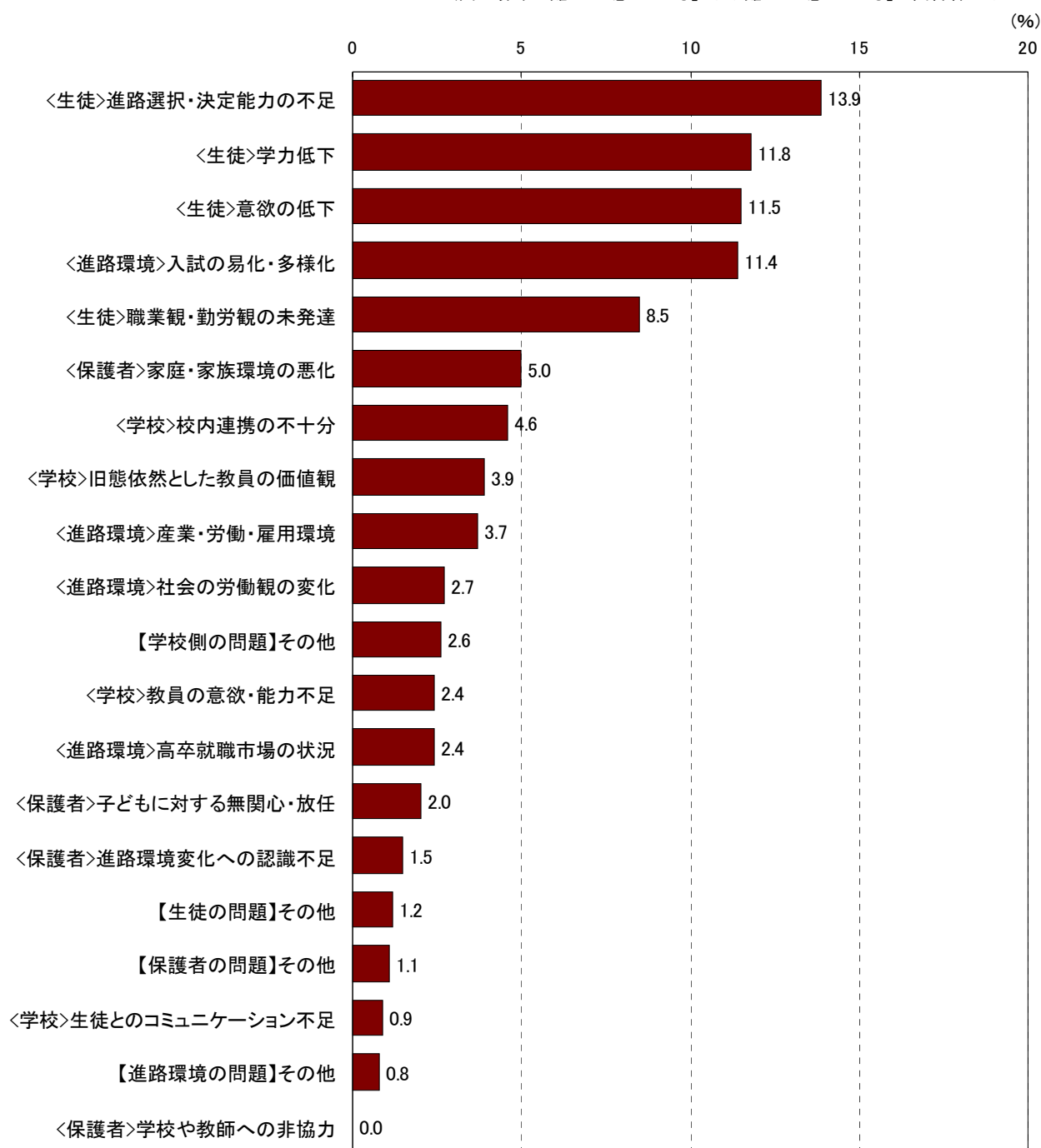
■最大の要因の上位に生徒の問題が集中

進路指導を困難にしているすべての要因のうち、最も大きな要因と感じるものを1つ選んでもらったところ、生徒に関する項目が上位に並んだ(図4)。

また、それらによってどのような困難が生じているかの自由記述も求めており、生徒の問題はp. 9、学校の問題はp. 11、進路環境の問題はp. 12、保護者の問題はp. 13でそれぞれ紹介する。

図4 進路指導を困難にしているもっとも大きな要因は何か

(図1「非常に難しいと感じている」「やや難しいと感じている」の回答者のみ N=739)



4. 高校生の問題点

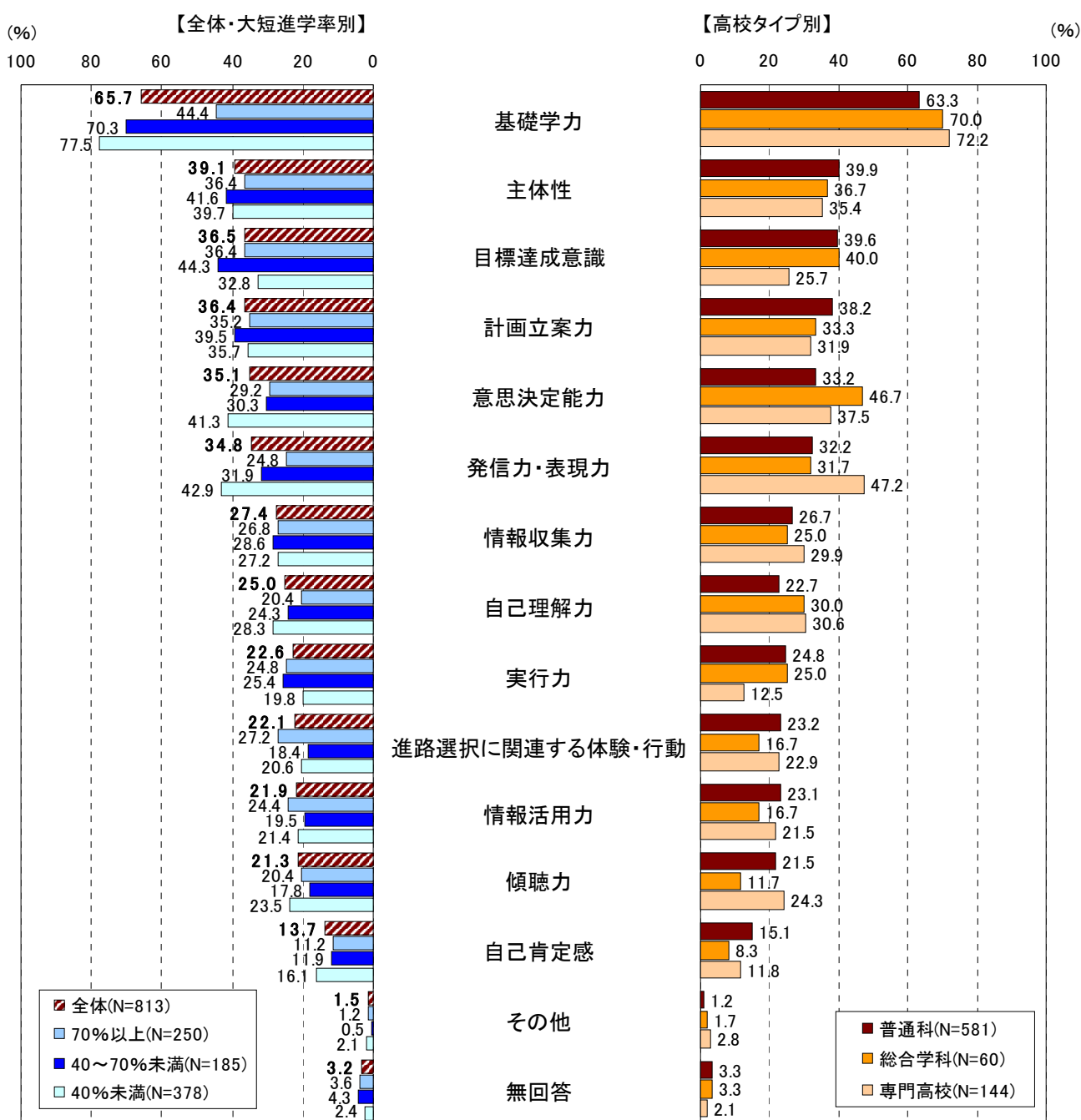
■「基礎学力」が最多の66%

■「主体性」「目標達成意識」など意欲面の不足も目立つ

自校の生徒が進路を実現する際に不足していると感じるものを5つ選択してもらったところ、最も多くあがったのは「基礎学力」でおよそ3人に2人が回答した(図5)。次いで「主体性」39%、「目標達成意識」37%といった意欲に基づく項目が多くあがった。

大短進学率による差を見ると、「基礎学力」や「発信力・表現力」は進学率が低いほど不足との回答が多かった。進学率[70%以上]は全体的に回答が少なめだが、「進路選択に関連する体験・行動」の多さが目立つ。学校タイプ別では総合学科で「意思決定能力」「自己理解力」が高めだが、学校生活においてこれらを求められる場面の多さを反映していることが考えられる。

図5 高校生に不足しているものは何か



■入試の易化により安易な進路選択が深刻化、学力低下は進学より就職のハードルに

進路指導を困難にする最大の要因（図4参照）についてのフリーコメントのうち、生徒に関する記述を見てみる（フリーコメント①）。【進路選択・決定能力の不足】に関するコメントでは、大短進学率が高い学校から「大学全入時代を迎え安易に入れる大学を選ぶ」とするなど入試の易化との関連が多く指摘された。【学力低下】は「学科試験のある企業はことごとく不採用」など、進学よりむしろ就職のハードルとなっているようだ。また、【意欲の低下】に関しては、卒業後のニート化を危惧する声もある。

フリーコメント① 生徒の問題でどのような困難が生じているか

■進路選択・決定能力の不足■

【大短進学率 70%以上】

○大学全入時代を迎え、**安易に入れる大学を選ぶ**とする（関東・甲信越／普通科）

○入学当初は国公立大学志望者が多いのだが、学年が上がるにつれて**易きに流れる**傾向が少なくない（九州／普通科）

○**教師の指導にすぐ飛びついてしまい、自分がない**。具体的なこと（志望校名など）を言うはずと信じてその方向に行ってしまう（関東・甲信越／総合学科）

○進路に限らず自己決定能力が未熟なため、**こちらからのアプローチに対して的確な反応が返せない**（関東・甲信越／普通科）

【大短進学率 40～70%未満】

○進路決定も他方本願で「**どうせなんともかなる**」と考えている生徒が多い（中・四国／普通科）

○**世の中の動きや周囲の動向に左右されやすく**、自分を見つめ、進路を考えようとしな（東海・北陸／普通科）

○どんな学校、どんな仕事を希望するのか、**自分で説明できなくなっている**。進路情報を消化できない（中・四国／普通科）

○進路選択時期が遅くなって、**情報不足のまま出願したり、内定後に変更を希望する者が出てきている**（関東・甲信越／普通科）

【大短進学率 40%未満】

○何をしたらよいか、何を選択したらよいか、何が自分に合っているか、**すべてに決定力不足**（関東・甲信越／専門高校）

○自分の進路について真剣に考えず、**まるで他人ごと**のようである（関東・甲信越／専門高校）

○生徒が進路決定しようとしなないので、**一方的に情報を与えるだけ**になってしまう（関東・甲信越／普通科）

○目標が定まらず、自分のしたいことが見つからないので、**指導の方法が見当たらない**（中・四国／専門高校）

○将来の見通しがなく、**進学でも就職でもなく卒業していく**（東海・北陸／普通科）

○自ら選択したという意識が低いので、**すぐに「離職」「退学」の道を選んでしまう**（関東・甲信越／専門高校）

■学力低下■

【大短進学率 70%以上】

○入学生徒の学力の差が以前より広がり、成績上位者と下位者に**同じ授業を展開するのが困難**（関東・甲信越／普通科）

○新教育課程のなかで基礎的な学力の低下が著しいにもかかわらず、**大学入試で求められている学力水準が同じ**（関西／普通科）

○大学進学者が多いが、**普通の大学教育に耐え得る学力に達していない**（関西／普通科）

【大短進学率 40～70%未満】

○学力低下により希望進路（主に大学）が達成できない。**考えることを嫌がる**ことから、進路についての意識も深まらない（九州／普通科）

○**日本語の理解力不足**がすべての教科に波及し、学力低下を招いているため、自己認識が危うい（中・四国／普通科）

○**集中力をつける訓練を積んでこない**生徒が多いため大変。小・中からの学習時間の減少が要因（東北／普通科）

○基礎学力の低下により、子どもが幼稚化。知識が貧弱であるため、**自分の世界から飛躍できない**（関西／普通科）

【大短進学率 40%未満】

○小中での基礎学力が身に付いていないため、**入社試験で人物を疑われる**ことがある（東海・北陸／普通科）

○学力低下が**すべての悪の根源**。必要最低限の読み書き・算術、コミュニケーション能力が低く積極性に欠けるので、より高レベルの指導ができない（東海・北陸／普通科）

○小学校から積み重ねて努力という姿勢を身につけていないため、進学に対しても**就職に対しても謙虚に自分自身を振り返るの努力ができない**。また驚くほど一般常識に欠けているが、**自己評価は非常に高い**生徒が多い（中・四国／普通科）

○**教員や保護者の話を十分に理解できない**生徒が増加。それをおかしいと思わない環境が存在（九州／普通科）

○簡便容易な入試で入学後、学力不足での**中途リタイアが増加**（東海・北陸／総合学科）

○学科試験のある企業を受けた場合、**ことごとく不採用**（北海道／専門高校）

■意欲の低下■

【大短進学率 70%以上】

○**困難な場面ですぐに諦めて**しまって、粘り強く取り組む姿勢がない（東海・北陸／普通科）

○こつこつと真面目に努力すれば報われるという価値観が薄れ、**受験することで自分の将来を開拓するという気概がない**（関西／普通科）

○**どこでも進学できればよい**という考え（関東・甲信越／普通科）

【大短進学率 40～70%未満】

○何事にも無気力の生徒が多く、**教員も影響を受けて意欲が低下**してしまう（東北／普通科）

○進路等の問題が**自身の問題と捉えることができない**から身が入らない。または予備校・塾に言われたままに行動する（関東・甲信越／普通科）

【大短進学率 40%未満】

○常に**誰かが何とかしてくれる、その時になれば何とか**なる、そしてダメならバイトでも生きていけると考えている（東北／総合学科）

○自ら行動しようという積極性に欠け、**教員の援助を待っている**（東北／普通科）

○「**…のために努力する**」姿勢が弱く、不十分な指導しかできない（関東・甲信越／普通科）

○就職で**フリーターになる**生徒が一定数存在する（関東・甲信越／その他）

■職業観・勤労観の未発達■

【大短進学率 70%以上】

○本校では6割が4年制大学に進学するが、**高学歴というより長学歴**になっているだけ（九州／普通科）

【大短進学率 40～70%未満】

○大学選びの基準が自己の学力のみとなり、**将来の生き方に関わっての選択とは**なりきらない（関西／普通科）

【大短進学率 40%未満】

○働くことについての意識が低く、**アルバイト感覚**である（東北／普通科）

○就職してすぐに辞める、または**研修期間中に辞める**等が多い（東北／普通科）

○考え方が甘いので、**推薦後の辞退、内定辞退も増加**（東海・北陸／普通科）

5. 進路指導体制の問題点

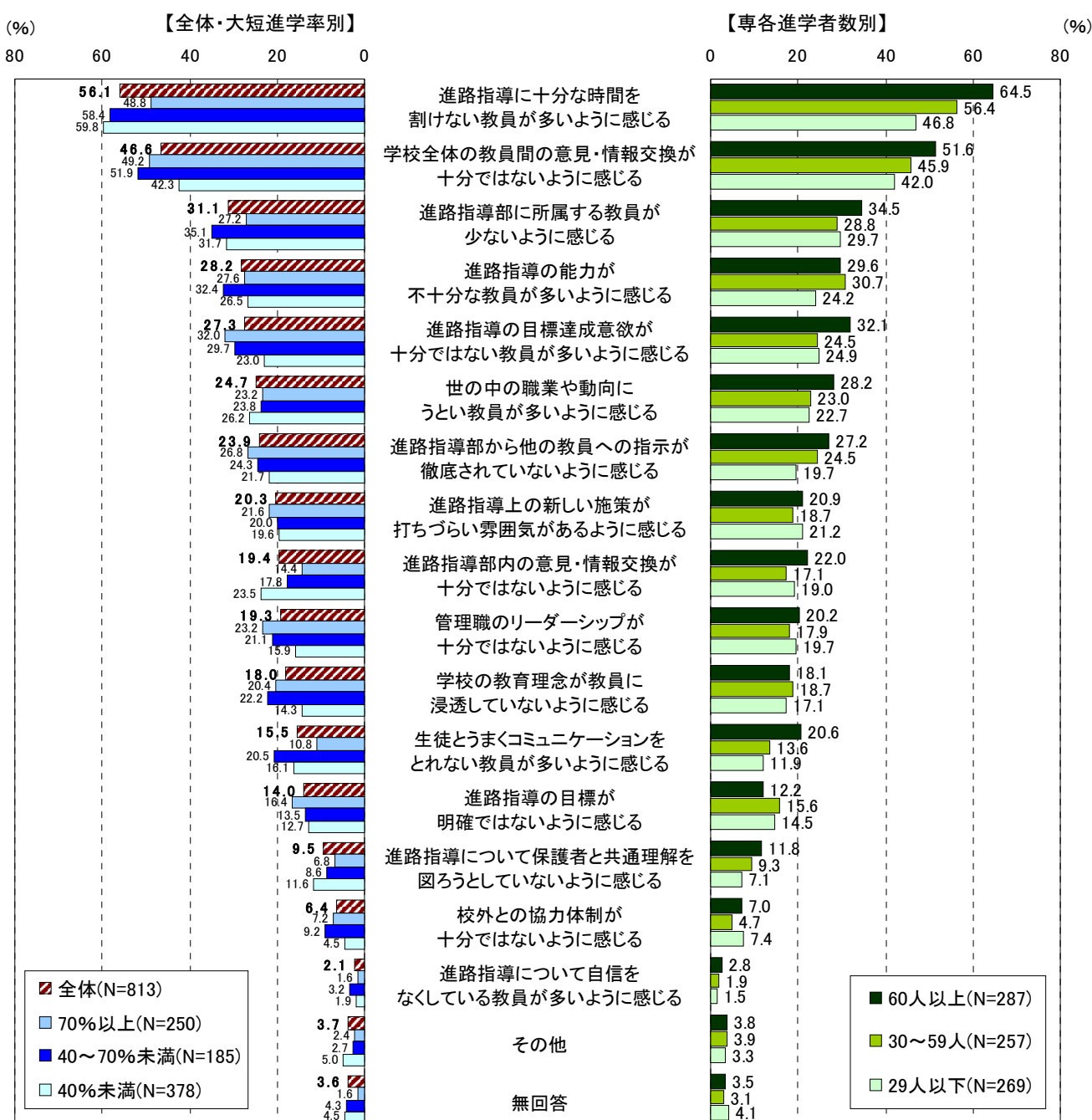
- 「十分な時間を割けない」が最多の56%
- 大短進学率の高い層で目立つ「教員間の意見・情報交換が十分でない」

自校の進路指導体制について不十分な点をすべてあげてもらった(図6)。回答が多い順に「進路指導に十分な時間を割けない教員が多い」56%、「学校全体の教員間の意見・情報交換が十分ではない」47%、「進路指導部に所属する教員が少ない」31%となり、時間や人数の不足感が強いことがわかる。

大短進学率[70%以上]においては「学校全体の教員間の意見・情報交換が十分ではない」が最多で、「進路指導の目標達成意欲が十分ではない」「進路指導部から他の教員への指示が徹底されていない」「管理職のリーダーシップが十分ではない」など、学校全体が一丸となって取り組むうえでの問題点が比較的多く指摘されている。

専門学校進学者数別では、多くの項目で進学者数[60人以上]が突出。専門学校進学者数が多い学校ほど、校内体制の課題意識が高い傾向が見られた。

図6 進路指導体制の不十分な点は何か



■学校全体での動きに高いハードル

進路指導を困難にしている最大の要因（図4参照）についての自由記述のうち、学校側の問題に関するものを見てみる（フリーコメント②）。【校内連携の不十分】については「学校全体としての進路指導方針の策定が難しい」「学校全体としてどちらの方向に生徒を育てていくのか不明確で共通認識がない」などが多数あげられ、学校全体で共通の目標や認識を持って動くことの難しさがうかがえる。【旧態依然とした教員の価値観】については、「時流に追いつかない」「『出口指導』に偏った対応に陥りがち」といった声が相変わらず少なくない。【教員の意欲・能力不足】では「『生徒が…だから』という言い訳で指導を怠る」など生徒に主体的に関わろうとしない姿勢を問題視する声が目立った。【その他】の「時間がいくらあっても足りない」のように、教師の余裕のなさの訴えも全体的に見られた。

フリーコメント② 学校の問題でどのような困難が生じているか

■校内連携の不十分■

【大短進学率70%以上】

○教員間の価値観や指導法の違いがあり、**学校全体としての進路指導方針の策定が難しい**（関東・甲信越／普通科）

○**分掌が細分化**されており、改革が進まない（関西／普通科）

○教員間の温度差が大きく、**仕事の偏り、指導にばらつき**が見られる（関東・甲信越／普通科）

○新たな取り組みを導入しようとしてもまったくと言っていいほど協力を得られず、**進路指導部に丸投げ**されてしまう（関東・甲信越／普通科）

○団塊世代の大量退職と**新たな大量採用**という現状のなかで、学校の方針が十分に伝わらないという悩みを抱えている（関西／その他）

○労働過多という理由で、**同一学年でも同じベクトル**に向けない（関東・甲信越／普通科）

【大短進学率40～70%未満】

○個人のノウハウを蓄積し、それを**他の教員が効率的に活用**できていない（北海道／普通科）

○全学年に目線をそろえた取り組みができていないため、何をやっても**長期的な成果**につながらない（関東・甲信越／普通科）

○完全週休2日制による校内業務の平日膨張化。**職員一人ひとりが多忙**を極めている（東海・北陸／普通科）

【大短進学率40%未満】

○学校全体としてどちらの方向に生徒を育てていくのか不明確で**共通認識がない**（東北／専門高校）

○一貫した**共通理解のもとでの指導**がないと効果が出ないが、それが難しい（東海・北陸／専門高校）

○職員室が科ごとに分かれているためか、**1つの連絡**にしてもなかなか徹底できない。また全員に行き渡っても、ズレが生じている場合がある（九州／専門高校）

■旧態依然とした教員の価値観■

【大短進学率70%以上】

○生徒の状況、社会の状況の変化にもかかわらず、**従来の考え方**からなかなか**抜け出せない**ため、生徒との間のギャップを埋められない（関東・甲信越／総合学科）

○**時流に追いつかず**、議論の進展が困難（関東・甲信越／普通科）

○進路指導が**入試の多様化**や**生徒のニーズの多様化**に対応しきれていない（東海・北陸／普通科）

○**情報収集・分析**を常に行っているという**姿勢に欠ける**ため、有効な手が打てない（東海・北陸／普通科）

【大短進学率40～70%未満】

○**キャリアガイダンスの必要性**をなかなか認められない（関東・甲信越／普通科）

○いわゆる**「出口指導」に偏った対応**に陥りがち（関東・甲信越／総合学科）

○いまだに**「〇〇大学に〇人入ることが目標」**、あるいは**「どの学科でもよいから〇〇大学」**などと生徒に言いたがる教員が、比較的若い人にも多い。また、キャリア教育の重要性を認識しようとしないうち、そもそもそれが何かわからない教員までいる（北海道／普通科）

○**「大短進学率40%未満」**という言い訳で指導を怠っている（東北／その他）

【大短進学率40%未満】

○人生の長いスパンで進路を考えさせられる教師が少なく、**とりえず目標を達成することのみ**に力を入れてしまう（九州／専門高校）

○**新しいもの、進学に対する“抵抗感”**（東北／総合学科）

○共学化に伴い**生徒の進路希望が大きく変化**しているのに、対応しきれていない（関東・甲信越／普通科）

■教員の意欲・能力不足■

【大短進学率70%以上】

○**システムを構築**してもそれが動かないため成果につながらない（関西／普通科）

【大短進学率40～70%未満】

○**高い進路目標設定への援助**ができず、結果的に生徒が易きに流れてしまう（東海・北陸／普通科）

○指導を統一するのが難しく、**可能性のある生徒の芽を摘んでしまう**（九州／普通科）

【大短進学率40%未満】

○**主体的な進路指導**が積極的に実践できない。生徒・保護者の希望を優先しすぎる（中・四国／普通科）

○**生徒を指導しきれない**ため、進路決定の時期が遅く、進路対策が十分にとれない。**生徒の可能性を活かしきれない**（北海道／その他）

○**「生徒が…だから」という言い訳**で指導を怠っている（東北／その他）

■生徒とのコミュニケーション不足■

【大短進学率40～70%未満】

○「生徒も保護者も希望しているのだから」という進路指導をする教員が多く、**生徒の能力や適性を把握**していない（北海道／普通科）

【大短進学率40%未満】

○**生徒のニーズを把握**できず、情報提供などが後手になっている（関東・甲信越／普通科）

○**3年生になってから本格的指導**が始まり、対応が遅い（関東・甲信越／普通科）

■その他■

【大短進学率40～70%未満】

○本来の指導以外にボランティア、総合学習、インターンシップなども入ってきて、仕事量が多すぎる。**進路の個別相談**にのりゆとりがない（関東・甲信越／普通科）

【大短進学率40%未満】

○教科指導という優先すべき仕事をかかえながら、進学から就職まで多様な進路に真剣かつ十分に対応するには、**時間がいくらあっても足りない**（九州／普通科）

6. 進路環境の問題点

■入試の易化が生徒の意欲や態度に影響

困難の最大要因（図4参照）についての自由記述のうち、進路環境の問題に関するものを見てみる（フリーコメント③）。【入試の易化・多様化】についてのコメントからは、「まったく勉強しなくても大学に合格してしまう」という状況が「学習に対して必死に取り組まない」「チャレンジする生徒が少なくなってきた」など生徒の意欲や態度に大きく影響しているようすが浮かび上がった。また、AO入試をはじめとする入試の多様化やめまぐるしく変わる入試制度によって、「指導しきれない」「仕事量が以前の何倍にも増えている」など指導しにくさを訴える声も多い。【産業・労働・雇用環境】や【高卒就職市場の状況】は全体的には状況が改善されているものの、「県内企業の募集が少ない」など地域によっては厳しさが続いている。また、「生徒の希望する職種の求人が少ない」など、求人数は増えても内容面で生徒の希望とのギャップが埋まらないようだ。

フリーコメント③ 進路環境の問題でどのような困難が生じているか

■入試の易化・多様化■

【大短進学率 70%以上】

○大学全入時代を迎えて入試が易化・多様化し、**努力を積み重ねて進路を追求していく体制がとれなくな**ってきている（関東・甲信越／普通科）

○それほど学力がない生徒でも、私大のAO・推薦入試で合格してしまう現状から、**学習に必死に取り組まない**生徒がおり、二極化が見られる（東海・北陸／普通科）

○AO入試の簡易化により、**定期テストさえ満足に勉強していない**（関東・甲信越／普通科）

○多様化するなかで「AO」と称して青田刈りのな募集を行う大学などが増え、生徒が落ちていて**学習に集中できる時間が減った**（北海道／その他）

○入試が多様化し、**時期もバラバラ、入試方法や科目もバラバラ**で指導しきれない（関東・甲信越／普通科）

○猫の目のように変わる入試システムに**対応するだけでやっと**。長期的な見地からのプログラムの立案、計画ができない（東海・北陸／普通科）

○**前年度のデータが十分に活用できない**（関東・甲信越／普通科）

【大短進学率40～70%未満】

○低学力あるいは意欲の乏しい生徒でも入学できる学校が増えた。生徒は「**今の学力でも入れる学校**」探しばかりを考え、学力のアップを図らない（東海・北陸／普通科）

○大学全入時代に突入り、高い目標・目的意識をもって**チャレンジする生徒が少なくな**ってきた（九州／普通科）

○大学の二極化が進んでおり、私学や予備校に通っていないとクリアできない大学群と、**赤点を何個抱えていてもAOで合格してしまう大学群**がある。公立高校では後者を選択してしまう生徒が多く、前者を選択させるには経済的、物理的にも難しい（関東・甲信越／普通科）

○入試の多様化と変化の速さに**進路担当者の理解が**ついていけず、適切・的確な指導が困難（関東・甲信越／普通科）

○入試制度の多様化に伴い求められる力

も多様となり、また**年間を通じて入試がある**ため、指導方法・時間に困難が生じている（東海・北陸／普通科）

○とくにAOを中心とする入試の多様化・早期化により、志望理由書・課題の指導、小論文指導、面接対策、担任作成書類の激増等、**仕事量は以前の何倍**にも増えている（関東・甲信越／普通科）

【大短進学率40%未満】

○**まったく勉強しなくても大学に合格**してしまう。そして先輩から後輩へと語り継がれる（関東・甲信越／普通科）

○大学、専門学校はどこかには入れることが、**生徒の意欲低下**につながっている（関東・甲信越／普通科）

○推薦による早期の進路決定、受験科目の軽減により、とくに**3年生の授業への意欲が年々**なくなってきた（北海道／普通科）

■産業・労働・雇用環境■

【大短進学率 70%以上】

○**社会の求める学生像と大学・高校の考える学生像に違い**がありすぎると感じる（中・四国／普通科）

○努力しても**きちんと報われるようになっていない**社会に生徒が希望を持ってなくなっている（北海道／普通科）

【大短進学率40%未満】

○自立へのモデルケースを描けない。実社会に出て成功していく道が示されずに、**ただ困難さばかりが強調**されている（関東・甲信越／普通科）

○求人条件が厳しいため、生徒の将来に不安を感じる。**低賃金、ボーナス無しで長時間労働**を強いられるケースが地域的にも多い（九州／専門高校）

○生徒の希望する職種と**企業側の求人職種に開き**があり、夢と現実の違いに気付かせ進路を決めさせるのに時間がかかる（東北／総合学科）

■社会の労働観の変化■

【大短進学率 70%以上】

○**親も社会もフリーターやニートを認**めていて「やりたいことが見つからないなら…」

といった甘やかしがある（中・四国／普通科）

【大短進学率40～70%未満】

○社会の変化に伴い、大人社会の変化がすべて学校に入り込んでいる。情報が混乱し、溢れ、**教員が置き去り**にされている（東海・北陸／普通科）

○**真面目にこつこつと努力した者が報われない**社会により、真剣に努力する者が馬鹿にされる、からかいの対象になるのではないかと不安を感じさせる（東海・北陸／普通科）

○社会の多様化に基づき、教育のあり方が混沌としている。そのなかで教育された子ども達は、**どう地に足をつけて生き、何を目標として進路選択すべきか迷**っている者が少なくない（関西／普通科）

【大短進学率40%未満】

○**生徒を社会人として育てようという社会**になっていない。コスト面だけを考えすぎている（九州／普通科）

○**必死に働かなくても生活できる**環境で、今だけを考えれば働く場所はある。または保護されている（中・四国／専門高校）

■高卒就職市場の状況■

【大短進学率40%未満】

○**景気回復の地域格差**が求人数にも関係しており、「不本意就職」が増えている（北海道／普通科）

○**県内企業の募集が少ない**（中・四国／普通科）

○キャリア教育を推進しても**就職や求人**に受け皿がないと、指導する教員、生徒ともに無力感をもってしまう（東北／総合学科）

○景気は好転しているものの、**生徒の選択の幅が広が**っていない（東北／専門高校）

○**生徒の希望する職種の求人がない**ため、妥協している（中・四国／専門高校）

○**企業の要求レベル（人材）が高**くなり、高校教育の範囲ではカバーできなくなってきた（東北／その他）

7. 保護者の問題点

■経済的・精神的支えになっていない

同様に、保護者の問題に関する自由記述をしてみる（フリーコメント④）。【家庭・家族環境の悪化】についてのコメントは大短進学率[40%未満]から多くあがった。「本人は進学を望むが経済的に困難」など家庭の経済状況が生徒の進路を制限するケースのほか、「家庭環境の悪さは子どもの意欲低下に直結」など精神面への影響も指摘されている。

【子どもに対する無関心・放任】では「学校任せ。無責任。社会性の欠如」「経済的バックアップや精神的支えにならない」といった厳しい批判も見られた。「生徒は説得できても親の理解が得られない」「学校における指導の限界を感じる」など、保護者への対応は生徒以上に難しい場合が少なくないことがわかる。

フリーコメント④ 保護者の問題でどのような困難が生じているか

■家庭・家族環境の悪化■

【大短進学率 70%以上】

○進路指導には職業観・勤労観が不可欠。それは幼い頃からの家庭生活のなかで培われるもの。**家で手伝いをもっとさせるべき**(東海・北陸／普通科)

○生徒が第一ではなくご自身を優先させる。**ゴリ押し、お金の問題を出してくる**など、親によって困らされている生徒、先生は多い(東海・北陸／普通科)

【大短進学率40～70%未満】

○あくまでも一部だが、日常的な言葉遣い、態度が乱れている生徒の親は、まるで**その子どもと同じ精神構造**。あきれてものが言えない(東北／普通科)

【大短進学率40%未満】

○本人は進学を望むが、**経済的に困難**なケースが本校では多い(関東・甲信越／普通科)

○進学予定者が直前になって、親から**入学金の用途が立たないから進路変更してくれ**と言う(東海・北陸／普通科)

○生徒の**情緒不安定、基本的な生活習慣ができていない**ために、進路に対する積極的姿勢をなかなか作り上げられない(九州／普通科)

○家庭環境が悪化、母子・父子家庭が増加することで**経済的に進学が困難な場合、話し合いが十分もてない**ケースが生じている(関西／専門高校)

○家庭でのコミュニケーション不足から生じるさまざまな問題。家庭環境の悪さは**子どもの意欲低下に直結**しますね(東海・北陸／普通科)

○家庭・家族が子どもを育てることができなくなってきており、**学校だけで子どもを教育するには無理**がある(北海道／専門高校)

■子どもに対する無関心・放任■

【大短進学率 70%以上】

○**「自分の人生なので自分の好きなようにさせます」**と言って、あまり進路のことについて考えていただけない(中・四国／普通科)

○親に**進路意識の低下**が見られ、したがって子ども任せの進路選択となることが多い。その子どもには意思決定能力、意欲の乏しさが感じられる(東海・北陸／普通科)

【大短進学率40～70%未満】

○**学校任せ**。無責任。社会性の欠如(関西／普通科)

○経済的バックアップや、**精神的支えにならない**(東海・北陸／普通科)

【大短進学率40%未満】

○生徒は説得できても、**親の理解が得られない**。結果として生徒の進路希望が叶わない(東海・北陸／普通科)

○学校における**指導の限界**を感じる(北海道／普通科)

○保護者が子どもと進路について**話し合いをもち、方向性を決めない**ので、生徒に対し適切な情報を提供できない(東北／普通科)

■進路環境変化への認識不足■

【大短進学率 70%以上】

○まったくの認識不足ならまだいいが、**偏った情報に固執**し、学校側の指導を批判する親が出てきた(東海・北陸／普通科)

【大短進学率40～70%未満】

○社会の変化、入試・方式の変化について**情報が不十分**であり、教員と保護者の接点がなかなかとれない(東北／普通科)

【大短進学率40%未満】

○**地元志向**からなかなか変更しない(北海道／専門高校)

○求人職種が上級学校へスライドしている状況にもかかわらず、**事務系への希望が多い**(北海道／総合学科)

■その他■

【大短進学率 70%以上】

○**「授業料を払っているから〇〇をすべき」**と考えている親が多くなっている(関東・甲信越／普通科)

【大短進学率40%未満】

○保護者自身に**生活力がない**うえに、**向上心もない**。そのことが子どもの職業観をほとんど決定している(関東・甲信越／専門高校)

8. 今後の進路指導の見通し

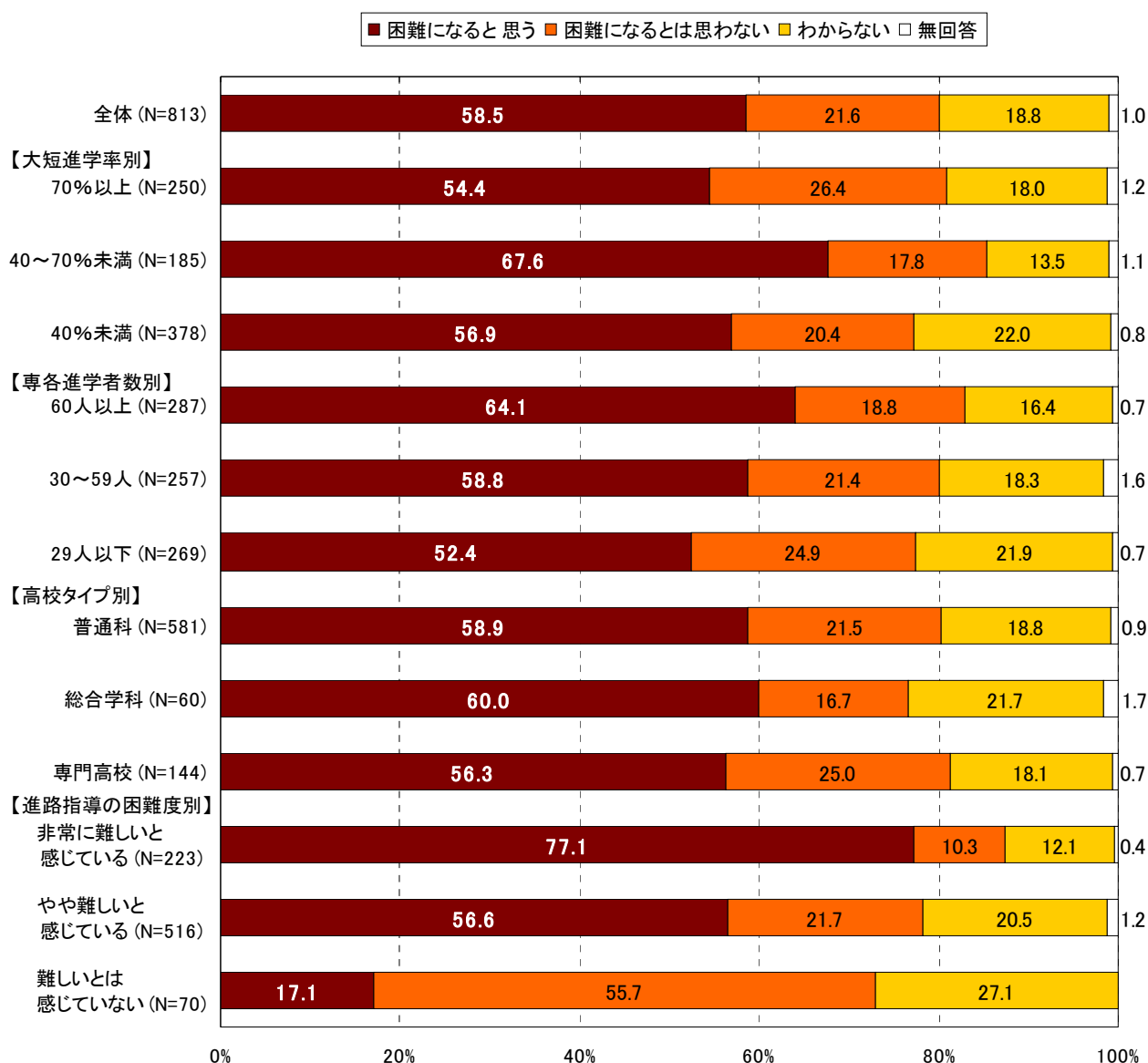
■「より困難になる」が約6割

■「現状が困難」という人の約8割が今後について「より困難になる」と回答

生徒を取り巻く環境が変化し続けるなか、今後の進路指導はより困難になるかと質問したところ、「困難になると思う」という回答は全体の6割近くに及んだ(図7)。「困難になるとは思わない」は22%で、「わからない」は19%だった。

クロス集計で「困難になる」が多かったのは、大短進学率[40~70%未満]、専門学校進学者数[60人以上]だ。また、現在の進路指導の困難度(図1参照)とクロスしてみると、現在「非常に難しいと感じている」人の77%が今後も「困難になる」と予測していた。

図7 今後の進路指導はより困難になるか



■揺るぎない方針の学校では「今後も困難さは変わらない」

今後の進路指導の見通しを図7のように回答した理由について自由に書いてもらった。「困難になる」という回答の理由には、「今までは合格させることが困難であったが、これからはモチベーションを持たせるのが難しい」「努力する生徒とそうでない生徒の差がよりついてくる」など、入試の易化や生徒の意欲低下などの現状が今後いっそう加速するという予想が多数を占めた。また、個別指導の重要性や、大学や企業に送り出した後まで視点を広げる必要性の高まりに伴って、教師の指導も難しくなるという見方もあった。

一方、「困難になるとは思わない」理由には、単なる楽観だけでなく、「将来の職業を意識させながらキャリア的な指導を行うのは、これまでも、また今後も変わらないと思う」「何のために学ぶ、働く、生きるという基軸があれば関係ない」など、環境変化でも揺らぐことのない指導方針をもつ学校からのコメントも見られた。

フリーコメント⑤ 今後の進路指導はどうなるか

■困難になる■

【大短進学率 70%以上】

○大学に入るのが当たり前という時代の中で、**本当に自分が何を学びたいかが考えられないまま「進学」を目的としてしまう**のではないか(関東・甲信越／普通科)
○今までは合格させることが困難であったが、これからは**モチベーションを持たせるのが難しい**(関東・甲信越／専門高校)
○**努力する生徒とそうでない生徒の差**がよりついてくる(東海・北陸／その他)
○情報過多になる一方で情報活用力不足により、**生徒・教員ともに混乱するorあまり考えなくなる**(関東・甲信越／普通科)
○ただ大学に入学させればいいのではなく、それぞれの大学が求めている学生像に近い生徒を入学させ、**入学後も活躍させることが大切**だと思うから(関東・甲信越／普通科)
○生徒の生き方を含めた進路指導になるだろうし、**教師の生き方も問われる**時代になると思う(関東・甲信越／普通科)

【大短進学率40～70%未満】

○ハードルが低くなり、**困難さを乗り越えることをしないまま社会に巣立つ**傾向がある(関東・甲信越／普通科)
○入れるか入れないかではなく、**自分に合ったところをどう見つけるか**、いっそう問われる時代に(東海・北陸／普通科)
○大学が高校化している。**大学後を見据えた指導**が必要(関東・甲信越／普通科)
○格差拡大、価値観の多様化から、おのずと**キャリアガイダンスも多様化**せねばならないだろうから(関東・甲信越／普通科)
○マスプロ的な進路指導では無理で、**個別指導が徹底**されなければならないと考えるから(中・四国／普通科)
○大学の**経営状態**まで理解しなければいけないから(関東・甲信越／普通科)
○**潰れる大学が出てくる**と予想。慎重に大学を選択する必要性が大きくなる(関東・甲信越／総合学科)

【大短進学率40%未満】

○合格しやすさや内定のもらいやすさの問題だけで進路指導をするわけではなく、

将来どのような人間になり、どのように生きていくか考えさせなければならないため

(北海道／普通科)
○就職・進学が易化するので、自分の進路をよく考えて決めないと**将来の離職とか方向転換**が多くなると思う(東海・北陸／専門高校)
○今後は「送り出す」だけでなく「送り出した後」の**対応が重要視**される時代がくると思うから(東海・北陸／総合学科)
○雇用状況も二極化時代を迎え、**弱者への指導がますます必要・重要**になってくると思うから(九州／普通科)
○**学校の中と外とのスピードがまったく違う**。教員のもつ情報量が世間と隔絶している(九州／総合学科)
○企業の求める人物は高校よりも上級学校の生徒へ変わりつつあり、その生徒達と競争できる**魅力のある生徒を育てていく必要**がある。しかし**生徒の意欲等はどんどん低下**しているように感じる(九州／専門高校)

■わからない■

【大短進学率 70%以上】

○社会環境の変化に**学校がついていけない**から(東海・北陸／普通科)
○今も結構大変は大変。「困難」かどうかは外的要因もあるが、**内面的面のウエイトが大**ではないか(九州／普通科)

【大短進学率40～70%未満】

○大学全入時代で「行ける大学・短大・専門学校」は増えるだろうが、**肝心の生徒のレベル低下**(学力、生活力)が心配(関西／普通科)

【大短進学率40%未満】

○出口指導はできるが、**その後の動向にまで目を向けると大学卒業後の進路、早期離職問題など困難性は高い**(東海・北陸／専門高校)
○**やり方次第**だと思います。我々は世の中の動きが変わればそれに対応していく手を打つしかないのです。その時の生徒にベストを尽くしてやるのが大切(東海・北陸／専門高校)

■困難になるとは思わない■

【大短進学率 70%以上】

○比較的**難関大にチャレンジする生徒が多く**、この傾向は今後も変わらないと思われる(関東・甲信越／普通科)
○**上位レベルの状況にそう変化はない**(関東・甲信越／普通科)
○**いつの時代にも困難な状況は存在する**。変化する環境への的確な認識と自主性、主体性の涵養が大切と考える(関西／その他)
○個人個人に対応した進路指導が今後も重要になってくるので、**情報をうまく収集すれば変わらない**(東海・北陸／普通科)
○将来の職業を意識させながら**キャリア的な指導を行うのは、これまでも、また今後も変わらない**と思う(東北／普通科)
○「生徒にとって最適な選択は何か」という**理念は変わらない**から(関東・甲信越／専門高校)

【大短進学率40～70%未満】

○基本的に**合格しやすくなる**ので、困難さが増すとは思われない(関西／普通科)
○**生徒の選択の幅が広がる**意味ではないのか(関西／普通科)
○高校では**何のために大学に進学するかという意識を高める**こと、大学では特色ある大学づくりが進められつつあるから(北海道／普通科)

○問題は**個別指導の徹底**で、そのために必要な教育の資質が求められる(関西／普通科)

【大短進学率40%未満】

○選ばなければ、基本的に**進学も就職も可能**だから(東北／普通科)
○当校は**個別指導中心**なため、困難度は毎年同じであるから(九州／普通科)
○**何のために学ぶ、働く、生きるという基軸**があれば関係ない(東海・北陸／普通科)
○必要とされる人材は**本質的に大きくは変わらない**と考えるため。そのための教育は本校で行われている(九州／専門高校)
○状況の変化に応じて**学校が変わればよい**。新しい発想がもてなくなると難しくなる(九州／総合学科)

II 各校の取り組み

9. 進路指導状況<生徒対象～校内で完結～>

■ほとんどの項目で実施率がアップ

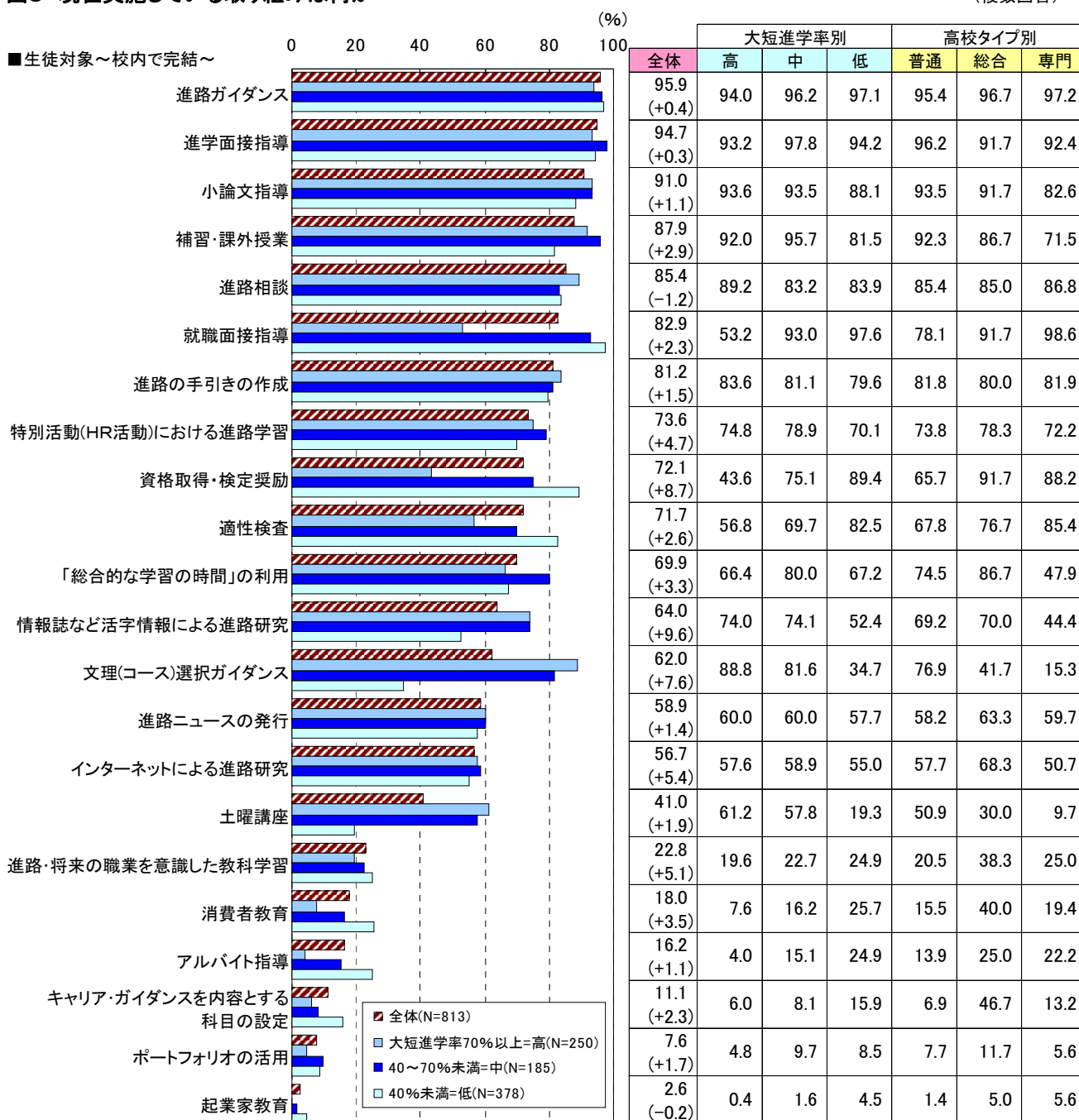
■「進路ガイダンス」「進学面接指導」「小論文指導」の実施率は9割超

自校で実施している進路指導の取り組みをすべてあげてもらった。ほとんどの項目で前回調査から実施率が上昇しており、進路指導の取り組みは充実の方向にあるようだ(図8～10)。

生徒対象～校内で完結～では「進路ガイダンス」96%、「進学面接指導」95%、「小論文指導」91%の実施率が高く、いずれも9割を超えた。「資格取得・検定奨励」72%、「情報誌など活字情報による進路研究」64%は前回からの増加が8ポイント以上と大きい。また、大短進学率による違いを見ると、「文理(コース)選択ガイダンス」「土曜講座」などは進学率が高いほど実施しており、「就職面接指導」「資格取得・検定奨励」「適性検査」などは進学率が低いほど実施している。

図8 現在実施している取り組みは何か

(複数回答)



※全体の()内は2004年調査(N=1122)との差

※【高校タイプ別】普通科(N=581)、総合学科(N=60)、専門高校(N=144)

10. 進路指導状況<生徒対象～外部・卒業生と連携～>

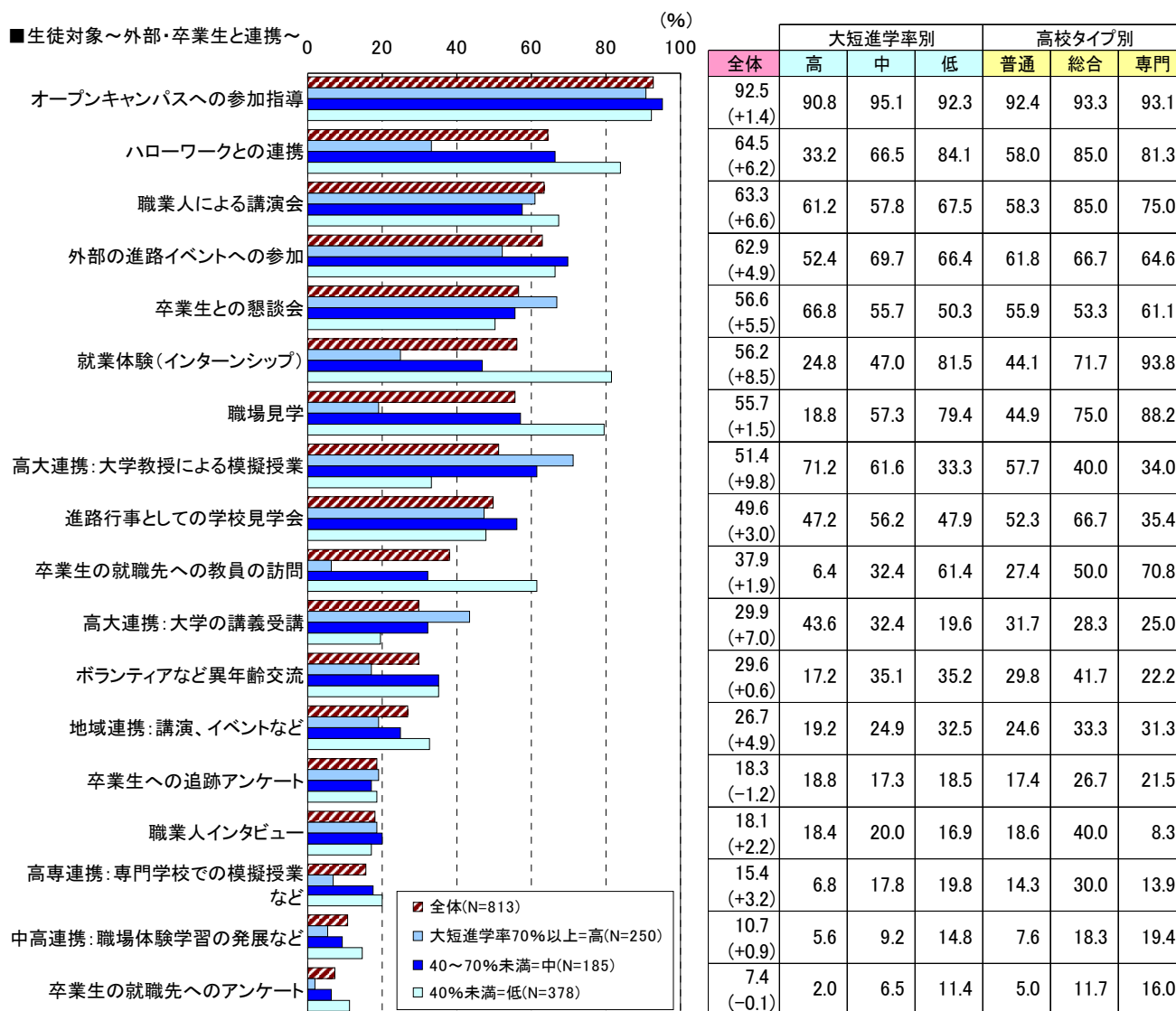
■「オープンキャンパスへの参加指導」が93%

■「就業体験」「大学教授による模擬授業」が前回から大きくアップ

生徒対象～外部・卒業生と連携～では「オープンキャンパスへの参加指導」93%が高い。前回より大きく増えたのが「就業体験」56%、「高大連携：大学教授による模擬授業」51%で、どちらも8ポイント以上増加した。大短進学率別に見ると、「卒業生との懇談会」「高大連携：大学教授による模擬授業」「高大連携：大学の講義受講」などは進学率が高いほど実施しており、「ハローワークとの連携」「就業体験」「職場見学」などは進学率が低いほど実施していた。また、全体的に普通科の実施率の低さが目に付く。

図9 現在実施している取り組みは何か

(複数回答)



※全体の()内は2004年調査(N=1122)との差

※【高校タイプ別】普通科(N=581)、総合学科(N=60)、専門高校(N=144)

11. 進路指導状況<保護者対象・教師対象>

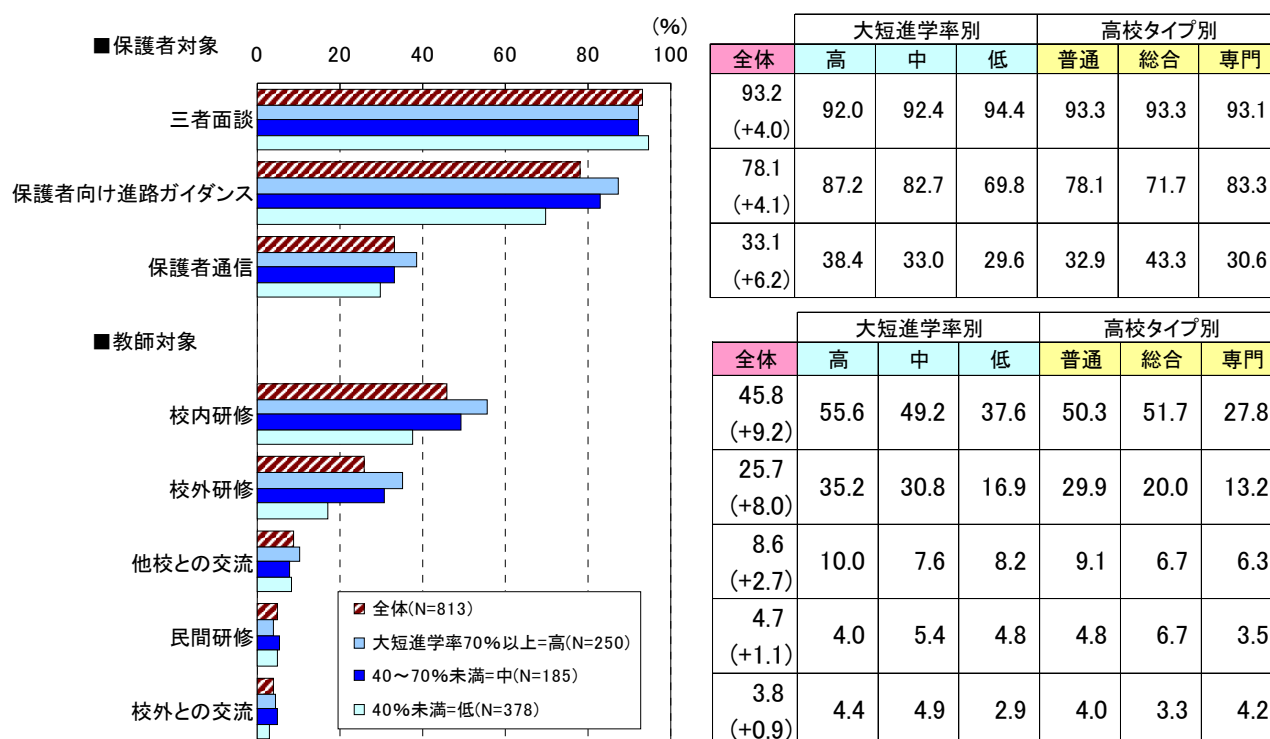
- 「三者面談」実施は9割超
- 教師の「校内研修」を約5割が実施

保護者対象の取り組みはすべて前回より増えており、「三者面談」は93%、「保護者向け進路ガイダンス」は78%と高い実施率となった。大短進学率別に見ると、「保護者向け進路ガイダンス」「保護者通信」という一斉の情報提供には進学率が高い学校ほど取り組んでいることがわかった。

また、教師対象の取り組みも全項目が前回より増加しており、「校内研修」46%、「校外研修」26%はとくに伸びが大きかった。この2つは大短進学率が高いほど実施している。

図10 現在実施している取り組みは何か

(複数回答)



※全体の()内は2004年調査(N=1122)との差

※【高校タイプ別】普通科(N=581)、総合学科(N=60)、専門高校(N=144)

Ⅲ 学校経営計画の浸透度

12. 進路指導の経営計画策定状況

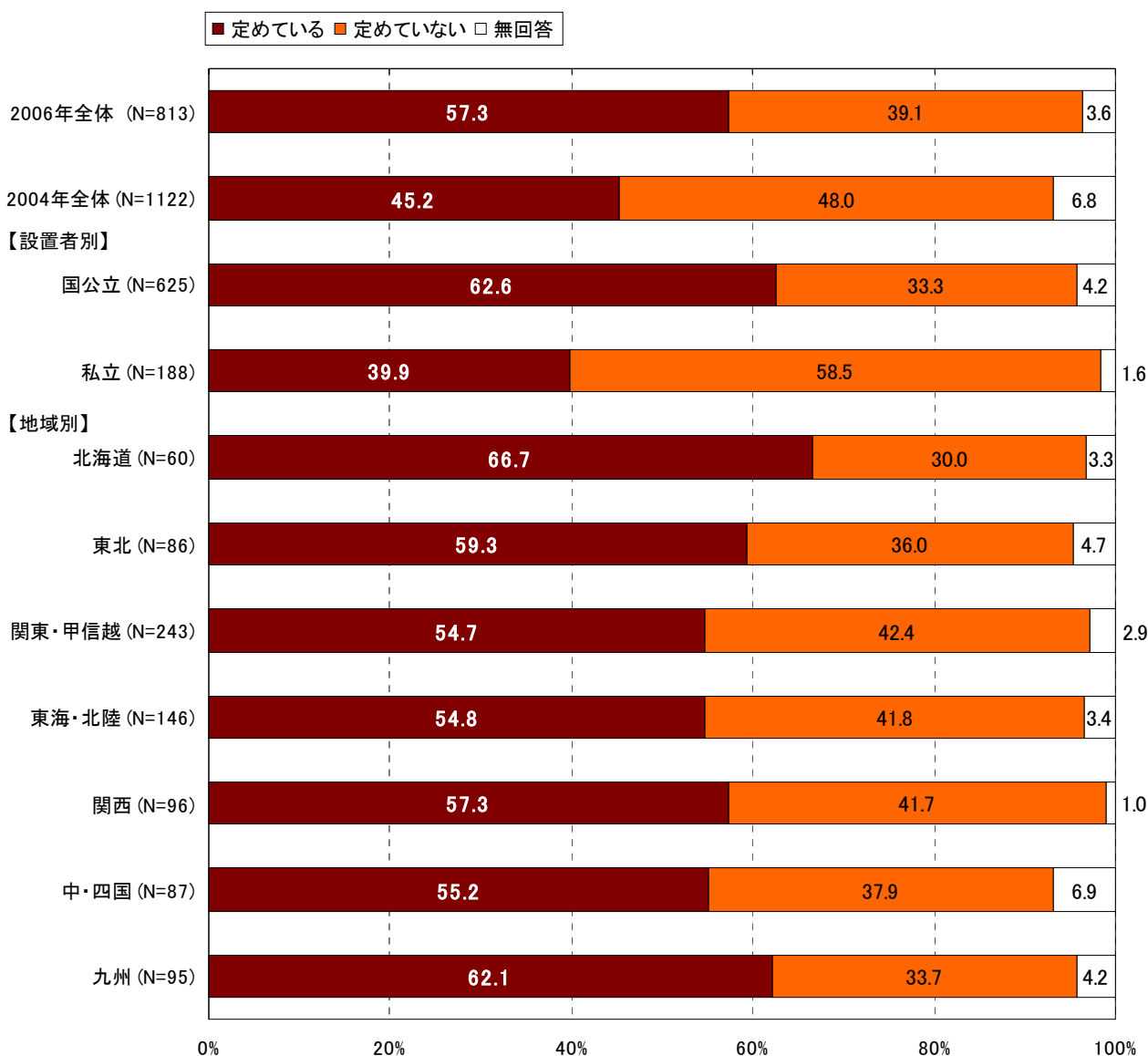
- 「定めている」は前回より12ポイント上昇し57%に
- 国公立、北海道や九州で高い策定率

学校経営計画の一環として進路指導の経営計画を定めているかたずねたところ、57%が「定めている」と回答し、「定めていない」の39%を上回った(図11)。「定めている」は前回の45%から12ポイントの増加となった。

設置者別に見ると、国公立の「定めている」は63%で、私立の40%と大きく差がついた。地域別では、北海道と九州に「定めている」が多く6割を超えている。

ちなみに大短進学率別を見ると、[70%以上]の「定めている」は54%だが[40%未満]は59%で、進学率が低いほど定めていた。高校タイプ別では、総合学科と専門高校の「定めている」が63%なのに対し、普通科は55%と少なめだった。

図11 進路指導の経営計画を定めているか



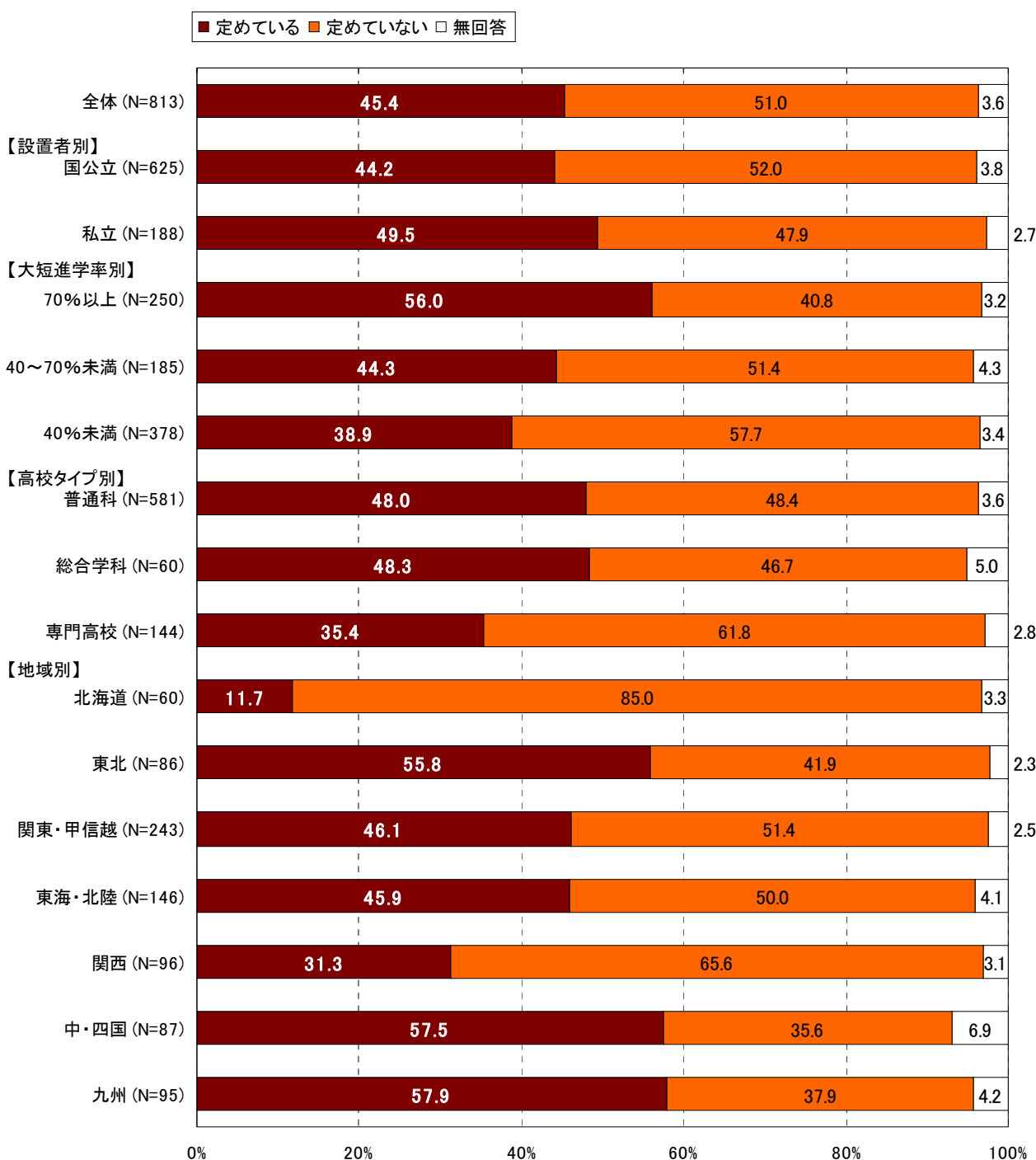
13. 進路指導の数値目標策定状況

- 「定めている」は45%、「定めていない」は51%とほぼ半々
- 私立や進学校で高い策定率

進路指導の数値目標を定めているかという質問については、45%が「定めている」と回答（図12）。「定めていない」の51%をわずかに下回ったが、ほぼ半々という状況だ。

設置者別では、国公立より私立に「定めている」が多かった。大短進学率が高いほど定めており、進学率[70%以上]は6割に近い。高校タイプ別では、専門高校のみ「定めている」が4割に届かず比較的低い状況となっている。地域による差が大きく、東北、中・四国、九州の「定めている」は5割を超えるが、関西は3割、北海道は1割にとどまっている。こうした状況は図11の学校経営計画の策定状況と大きく異なっており、学校経営計画と数値目標は必ずしもリンクしていないことが考えられる。

図12 進路指導の数値目標を定めているか



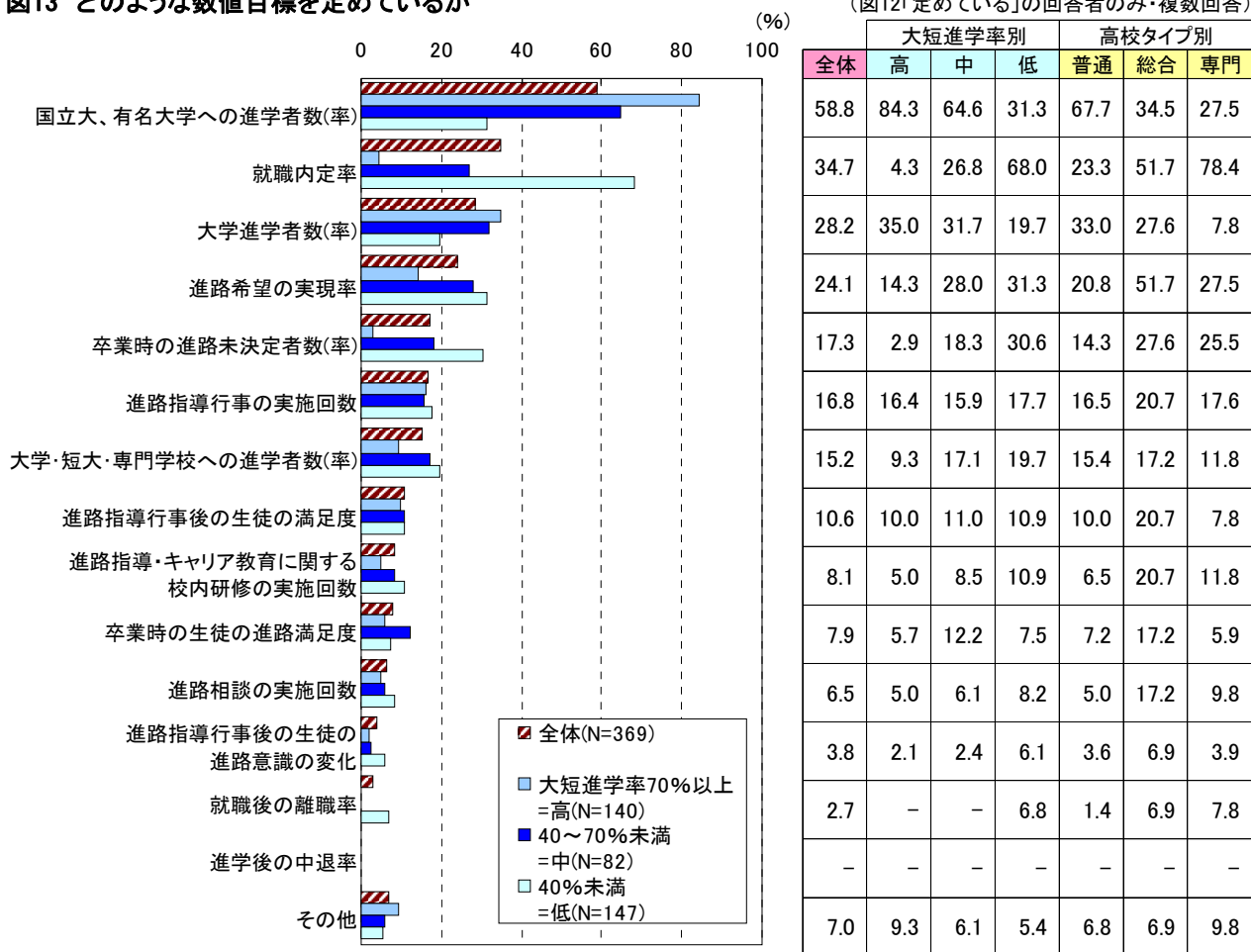
14. 数値目標の内容と有効性

- 目標の内容は「国立大・有名大学への進学状況」が約6割
- 「進路指導をよりよくするために有効」は約5割で2年前より増加

進路指導の数値目標を定めていると回答した人（図12参照）に、その数値目標の内容についてたずねた。最も多かったのは「国立大、有名大学への進学者数（率）」で59%が回答した（図13）。生徒の進路状況との関連が大きく、大短進学率[70%以上]では「国立大、有名大学への進学者数（率）」が84%と突出。大短進学率[40%未満]の最多は「就職内定率」68%で、「卒業時の進路未決定者数（率）」31%も比較的多い。学校タイプ別では、総合学科で「進路指導行事後の生徒の満足度」「卒業時の生徒の進路満足度」など生徒の満足度を指標にする割合が大きい。

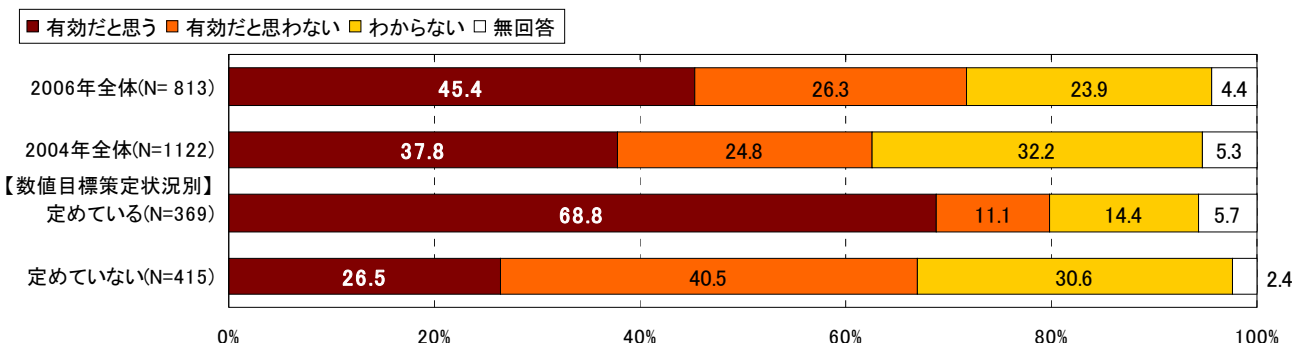
また、数値目標が進路指導をよりよくするのに有効かを質問したところ、「有効だと思う」は45%で前回の38%から増加した（図14）。数値目標を定めている学校で「有効」は7割近いのに対して、定めていない学校では3割にも満たず、策定状況によって認識に大きな開きがあった。

図13 どのような数値目標を定めているか



※【高校タイプ別】普通科(N=279)、総合学科(N=29)、専門高校(N=51)

図14 数値目標は進路指導をよりよくするのに有効か



IV キャリア教育の状況

15. キャリア教育の進捗状況

■何らかを推進している高校は8割弱

■「キャリア教育の意味を生徒に伝えている」が約3割

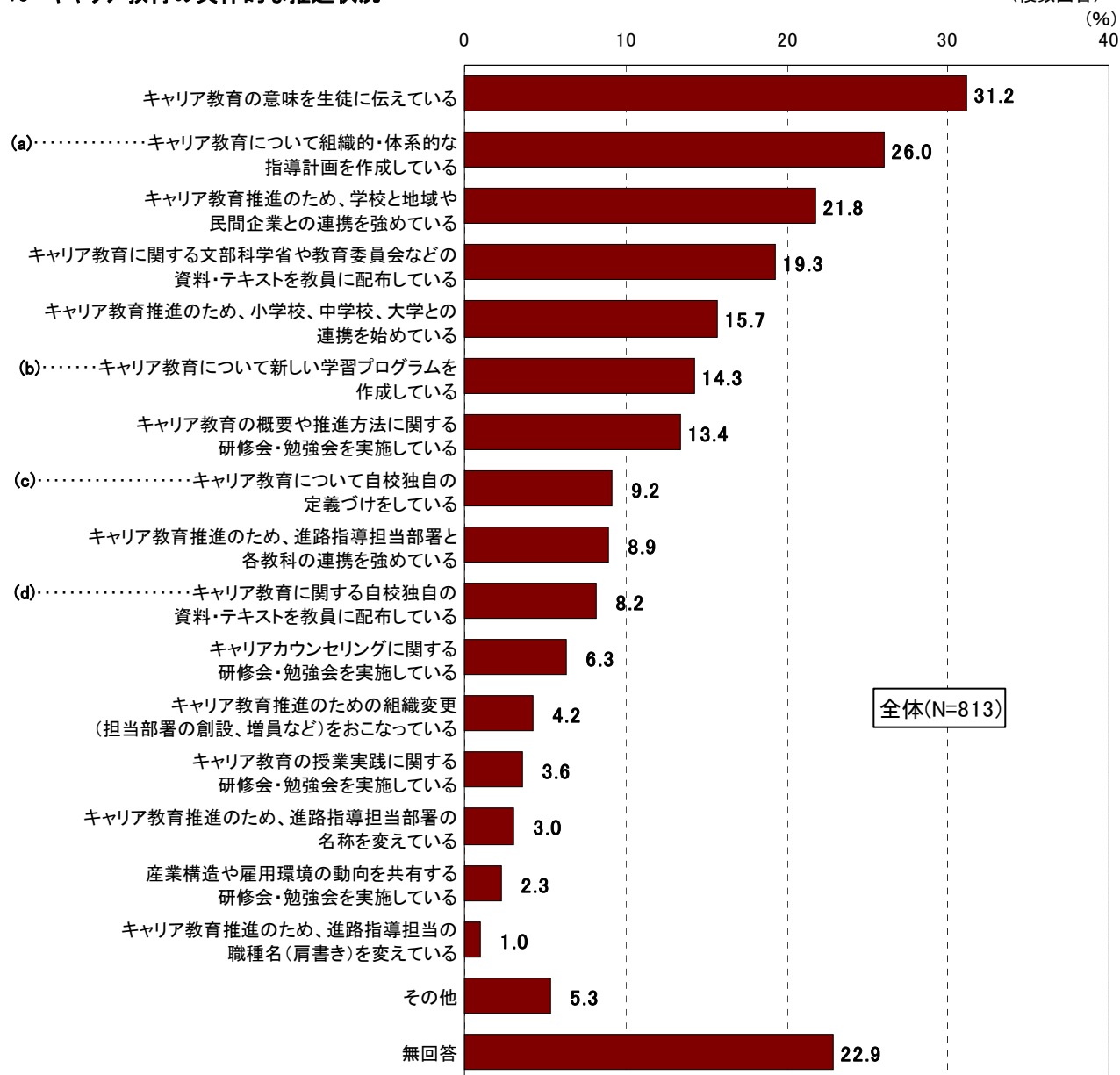
児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる「キャリア教育」が文部科学省から提言されて2年余り経ち、高校現場はどのような状況になっているだろうか。

まず、キャリア教育に関して自校で推進している内容を聞いた(図15)。「無回答」の23%を除く約8割から何かしらの回答が得られたが、最も多かった「キャリア教育の意味を生徒に伝えている」でも31%、次の「キャリア教育について組織的・体系的な指導計画を作成している」は26%と各項目の比率が低めで、状況は各校でさまざまなようだ。

また、「無回答」の23%は、キャリア教育に関してとくに何も推進していない学校が含まれると考えられる。

図 15 キャリア教育の具体的な推進状況

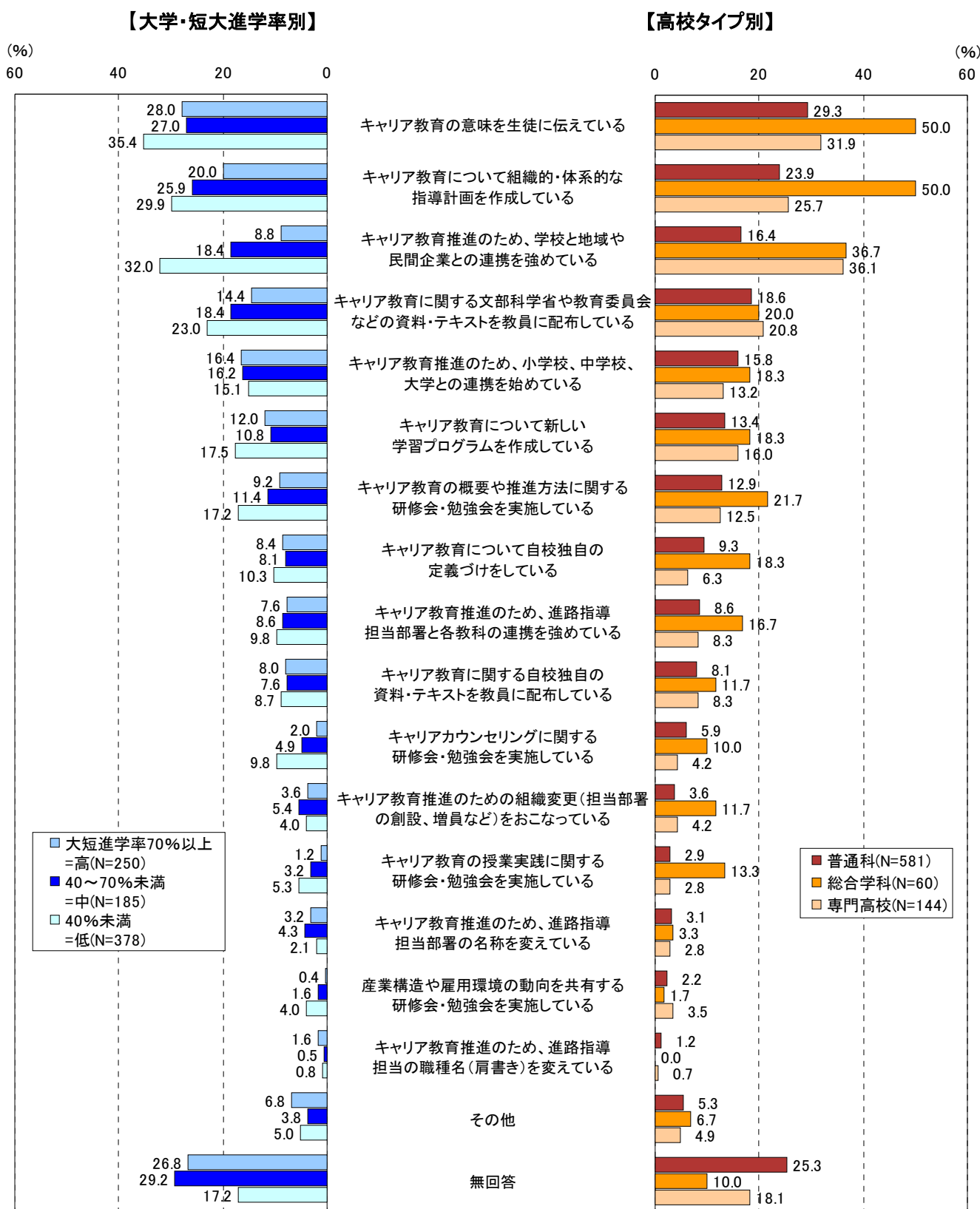
(複数回答)



※「無回答」以外の回答者を【キャリア教育推進校】、選択肢(a)~(d)のいずれか2つ以上の回答者を【キャリア教育先進校】と呼ぶ

図 16 キャリア教育の具体的な推進状況～大短進学率別および高校タイプ別～

(複数回答)



16. キャリア教育への認識

■「生徒にとって有意義」が最多の53%

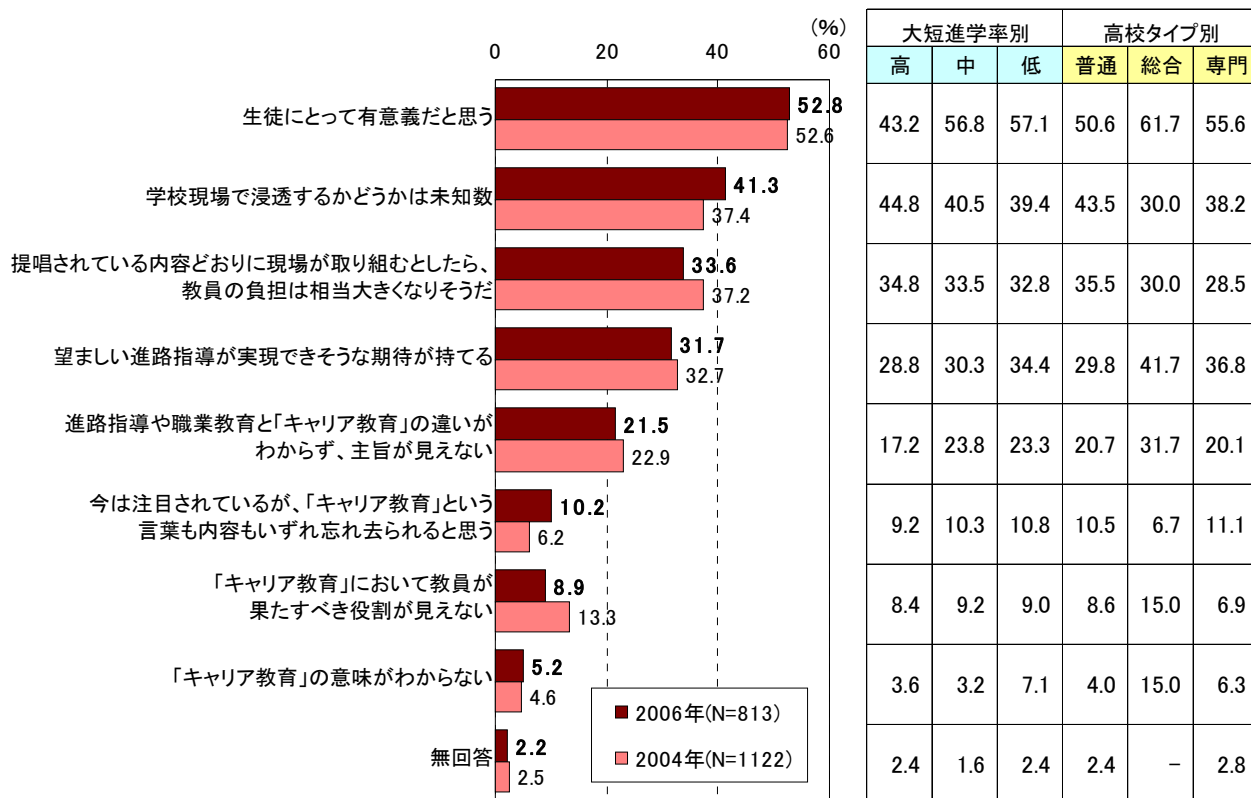
■先進校の「生徒に有意義」は74%、「望ましい進路指導が実現できそう」は61%と前向きな回答が高め

キャリア教育に対してどのように考えているか質問したところ、前回に引き続き「生徒にとって有意義」が53%と最も多かった（図17）。しかし、「学校現場で浸透するかどうかは未知数」41%や「『キャリア教育』という言葉も内容もいずれ忘れ去られる」10%が前回より増えている点も見逃せない。

クロス集計では、「生徒にとって有意義」「望ましい進路指導が実現できそう」という肯定的な回答が、大短進学率[70%以上]や普通科で低めだ。キャリア教育先進校（図15(a)～(d)のいずれか2つ以上の回答者）ではこれら肯定的な回答の多さが目立ち、取り組み状況との相関は高い。

図17 キャリア教育をどう考えているか

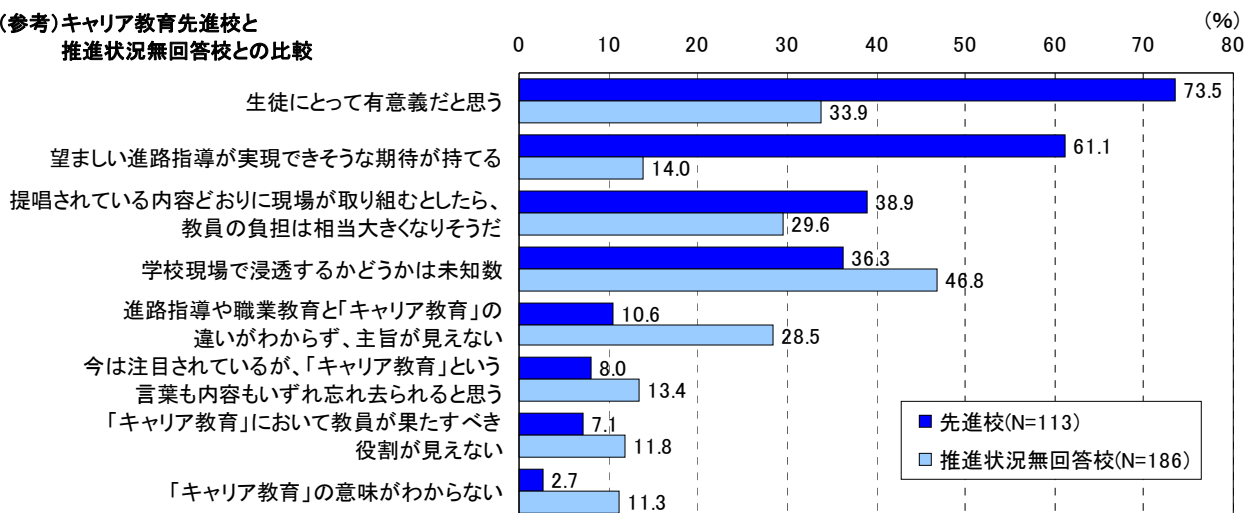
（複数回答）



※【大短進学率別】70%以上＝高(N=250)、40～70%未満＝中(N=185)、40%未満＝低(N=378)
【高校タイプ別】普通科(N=581)、総合学科(N=60)、専門高校(N=144)

(参考)キャリア教育先進校と
推進状況無回答校との比較

（複数回答）

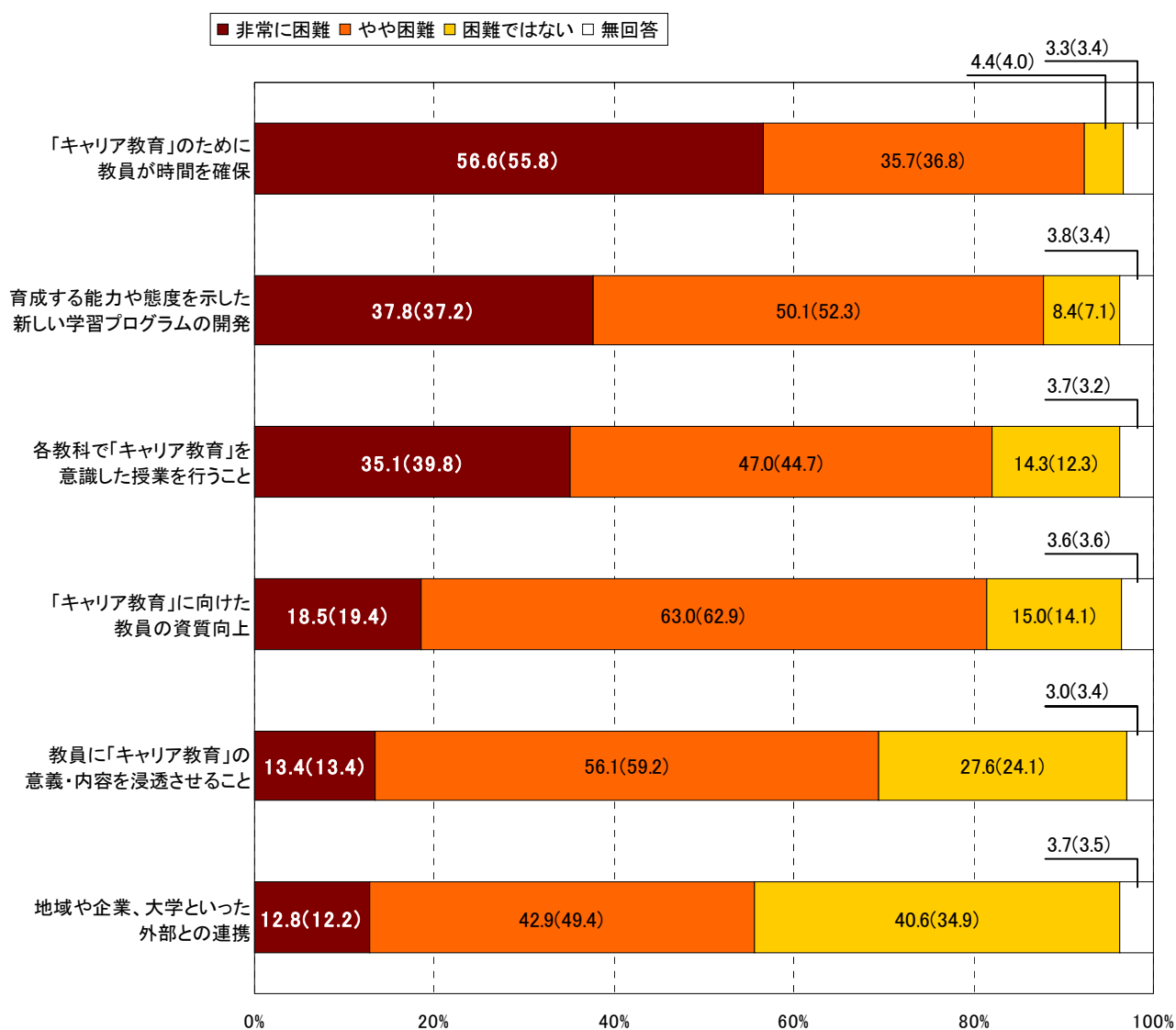


17. キャリア教育の課題別困難度

- 「教員の時間確保が困難」が9割超で最大の課題
- 「新しい学習プログラムの開発が困難」も9割近く

キャリア教育の推進過程にある各課題について、困難を感じているかどうかをたずねた（図18）。『キャリア教育』のために教員が時間を確保」「育成する能力や態度を示した新しい学習プログラムの開発」は、「非常に困難」と「やや困難」の合計がおよそ9割となった。

図18 何に困難を感じているか



※2006年の全体N=813、()内は2004年調査(N=1122)

18. キャリア教育による変化

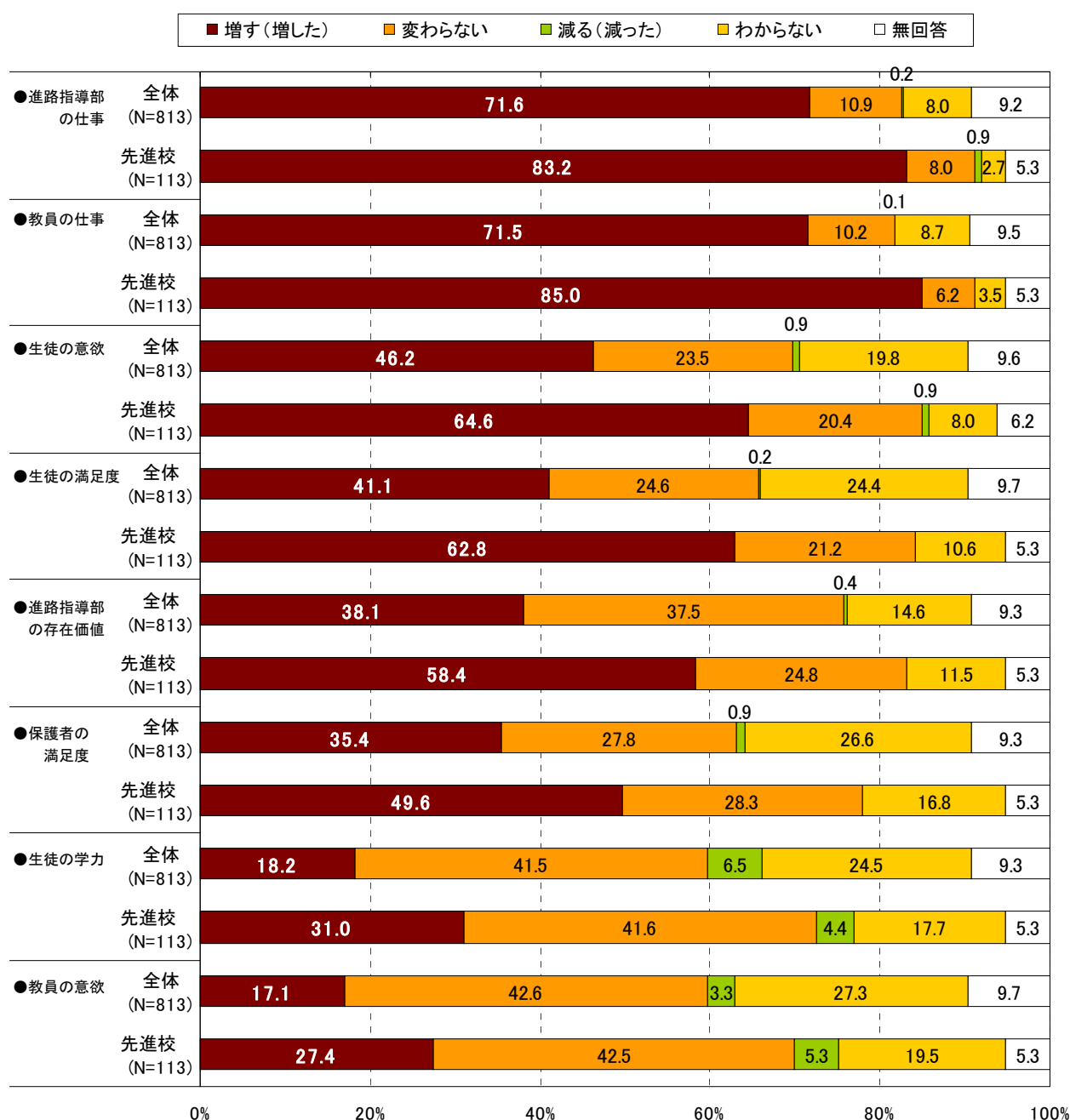
■「進路指導の仕事」「教員の仕事」が「増」は7割超

■「生徒の意欲が増す」は5割弱

キャリア教育の推進によって生徒や学校はどう変化すると思うか、もしくは実際にどう変化したか、8つの点について聞いた（図19）。「進路指導部の仕事」「教員の仕事」は「増す（増した）」が7割を占め、多くの教師がキャリア教育による負担増を感じていることがわかった。肝心の「生徒の意欲」については46%、「生徒の満足度」については41%が「増」と回答した。「進路指導部の存在価値」「保護者の満足度」は4割弱、「生徒の学力」は2割弱が「増」。「教員の意欲」は全項目中で最も「増」が少ない17%で、「変わらない」が42%だった。

これらとキャリア教育先進校（図15参照）の回答状況を見比べてみる。先進校では「生徒の意欲」が「増」は65%、「生徒の満足度」が「増」は63%となるなど、全ての項目で先進校の「増」が全体平均を上回った。

図19 キャリア教育でどう変わる・変わったか



■現場への浸透が進まない言葉と概念

キャリア教育について、取り組み状況や意見などを自由に書いてもらった。多く目についたのは、キャリア教育への反感とも受け取れるコメントだ。「『キャリア教育』という名称が失敗だったのではないか」という言葉への違和感や、「従来の進路指導とどこが違うのか不明」など概念の理解がいまだに深まらない現場のようすが浮かび上がった。また、「強制的に上から『キャリア教育』を推進されるとこれまで築き上げたシステムが混乱する恐れがある」と、従来からキャリア教育的な指導を実践する学校からは戸惑いの声もあがった。

重要性を感じてキャリア教育に取り組もうとする学校も少なくないが、推進する上でのさまざまな困難が報告された。なかでも「一番の困難は全教員が意義を理解し、同じ目線で指導が展開できるか」など、教員の理解と協力に関する困難が目立った。

一方で、キャリア教育による成果が見え始めた学校もある。「生徒は進路を意識し将来を語り始めた」など生徒は確実に変化しているようだ。こうした学校のキャリア教育推進状況を個別に見てみると、いずれも活発に取り組んでいた。

フリーコメント⑥ キャリア教育の状況・意見

■違和感、戸惑い、反感■

【大短進学率 70%以上】

○学校ごとに意味が異なり、一言でキャリア教育と言うのはどうかと思う。キャリア教育を**すべての高校で同じ意味で取り扱う、あるいは同じ言葉で実施することが問題**であると感じる(関西/普通科)

○本校にはまだキャリア教育は不必要。将来何になりたいかを考えさせて進学指導し、多くは将来を見据えている。**昔ながらの進路指導でまだやっていくつもり**です(関西/普通科)

【大短進学率40～70%未満】

○「キャリア教育」に重点を置くと、どうしても**「実学志向」になりがち**。短絡的に職業に直結したものばかり追いかけて、**器の小さい人間ばかり増加したつまらない社会**ができてきたことに危機感をもっている(関東・甲信越/普通科)

○言われていることは進路指導、さらには教育の基本で、ことさら新しいことでもありません。**流行言葉を安易に使う風潮にはなじみません**(東海・北陸/普通科)

○「キャリア教育」という言葉が先行しすぎており、**実質が理解されていない**。個人的にも疑問が多い(関東・甲信越/普通科)

○现阶段でも**仕事量が多く**、処理するのに苦慮しているなかで、新たな取り組みに十分な準備等ができるか心配である(東北/普通科)

【大短進学率40%未満】

○「キャリア教育」という名称が**失敗**だったのではないかと。自己を見つめること、死ぬまでどう生きるかを考えることが重要なのに、「キャリア」を「職業」と解釈されてしまった(関東・甲信越/普通科)

○従来の進路指導とどこが違うのか**不明**。カウンセリングもよく言われるが、研修を受けた限りでは自分たちがやってきたことと大差ないと思うのだが(関東・甲信越/普通科)

○キャリア教育が話題となる以前から、工業高校として自立して生きていくための教育をしてきたという自負がある。強制的に上から「キャリア教育」を推進されると、**これまで築き上げたシステムが混乱する恐れ**がある(九州/専門高校)

■現在、模索中■

【大短進学率 70%以上】

○私学の中堅に位置する本校においては、**進学指導が第一にならざるをえない**。しかしながら「キャリア教育」の重要性、必要性も感じており、ジレンマを感じる(関東・甲信越/普通科)

○キャリア教育の意義とその効用を**教員に示すのに労力がかかる**(東海・北陸/普通科)

○生徒へのキャリア教育もさることながら、**教師の資質を向上させるキャリア教育の模索が困難**に感じる(関西/普通科)

【大短進学率40～70%未満】

○キャリア教育が必ずしも学びの広がりにつながらず、**職業・資格にばかり目がいつてしまいがち**(関東・甲信越/普通科)

○来年度からカリキュラムの中に位置づけて取り組むべく検討中。年間を通じての指導案作り、教材準備などいくつかの困難が予想されるが、一番の困難(心配)は**全教員が意義を理解し、同じ目線で指導が展開できるか**である(東海・北陸/普通科)

【大短進学率40%未満】

○キャリア教育を推進すべく一生懸命取り組んできたが、**教員側の負担過重を訴える声が多く**、行事等の精選(実質的な減)をおこなっている(関東・甲信越/普通科)

○去年1学年で努力しましたが、あまりうまくいきません。キャリア教育に対する教員理解度の甘さや、キャリア教育自体の脆弱性(学習指導要領に記載がないなど)により、**忙しい現場に根付かせるのは困難**です。管理職が強いリーダーシップを発揮しなければ難しい(東海・北陸/普通科)

○キャリア教育の推進にH15年から少しずつ取り組んでいる。**工業高校に合ったキャリア教育の確立を考え**、現在いろいろなケースを試行している段階である(東海・北陸/専門高校)

○本校ではこの変化に対応すべくカリキュラムの改訂を行っている。これまでの「工業科は就職、普通科は進学」という考え方を変えるためにも、この改訂は重要であると思う。多少負担は増えるかもしれないが、そこは**教職員のやる気にかかっている**(九州/専門高校)

■見え始めた成果■

【大短進学率 70%以上】

○計画的な進路研究を行い、将来何になりたいか・したいかで進路を考えさせ、大学等で何を学びたいかを意識させるプログラムをガイダンス等で実施している。**生徒は進路を意識し将来を語り始めた。目がいきいきとしてきたように感じる**(関東・甲信越/普通科)

○教材を見つける、作り出すことが難しいが、専門のスタッフで会議をしながら進めている。**進路未決定者が少なくなった**ことはプラス面だと思う(関西/普通科)

【大短進学率40～70%未満】

○合格させた後のことまで視野に入れて指導することが当たり前になろうとしている(東海・北陸/普通科)

○生徒自身が、**なぜ進学するのか、なぜ働くのか、という意識をもって進路決定**できている(関東・甲信越/普通科)

○学校全体で学習指導のあり方を再検討し、本校生徒のキャリア形成にとって**必要な基礎学力とは何かを問い直そう**という動きが生まれている(関西/普通科)

【大短進学率40%未満】

○学ぶこと、働くこと、生きることの連続性がうまくつながるようになってきた。生徒が**自分の将来に対して主体的に考える**ようになり、各進路先からの**ドロップアウトがなくなった**(東海・北陸/普通科)

○本校の取り組みが偶然にもキャリア教育の実践例として各地から問い合わせがあり、外部からの評価を刺激として**前向きに捉えてくれる仲間が増え**つつあります(九州/普通科)

○「生き方」に関する講演や文章を聴かせたりすることで、生徒たちが目先のことよりも、**もっと先のことに目を向ける**ようになったと思う(九州/専門高校)

○確実によい結果が出ました。就職は「**会社**」ではなく「**仕事**」で応募先を決めるようになりました(東北/総合学科)

19. 専任キャリアカウンセラーの必要性

- 「必要」は46%、「不要」は23%。総合学科では68%が「必要」
- 望むのは「キャリアカウンセリングの専門家」

キャリア教育で極めて重要と位置づけられるキャリアカウンセリングについて、現場の教師はどう考えているだろうか。キャリア教育の推進上、校内に専任キャリアカウンセラーが必要かと質問したところ、半数近い46%が「必要」と回答し、「不要」の23%を大きく上回った(図20)。「必要」は大短進学率が低いほど、また学校タイプでは総合学科が多かった。現在の進路指導の困難度別(図1参照)に見ると、現状が困難なほど必要としていることがわかる。

さらに、「必要」の回答者に専任キャリアカウンセラーに望む経験をたずねたところ、7割近くが「キャリアカウンセリングの専門家」と答えた(図21)。「企業経験者」は20%、「教員経験者」は10%だった。

一方、「不要」の回答者に専任キャリアカウンセラーの設置以外に望むことを聞くと、「すべての教師がキャリアカウンセリングスキルを持つことが必要」が56%と最も多かった(図22)。

図20 専任キャリアカウンセラーは必要か

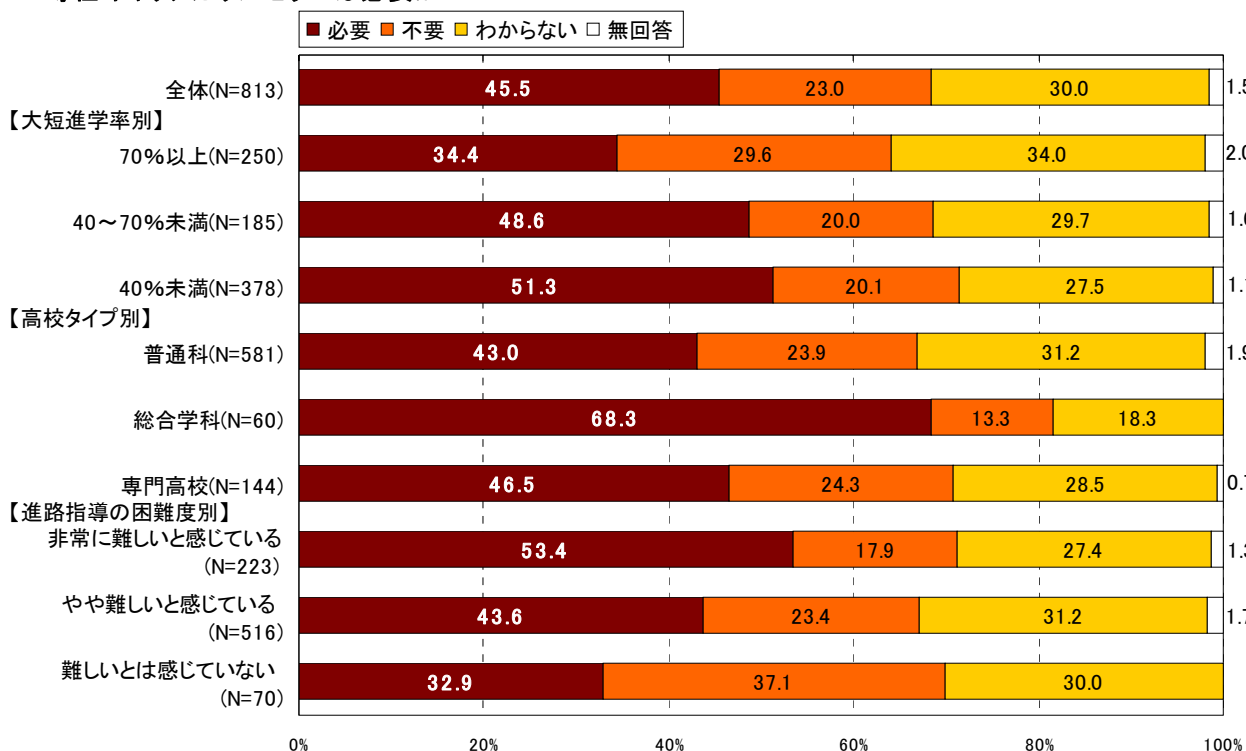


図21 専任キャリアカウンセラーに望む経験は

(図20「必要」の回答者のみ)

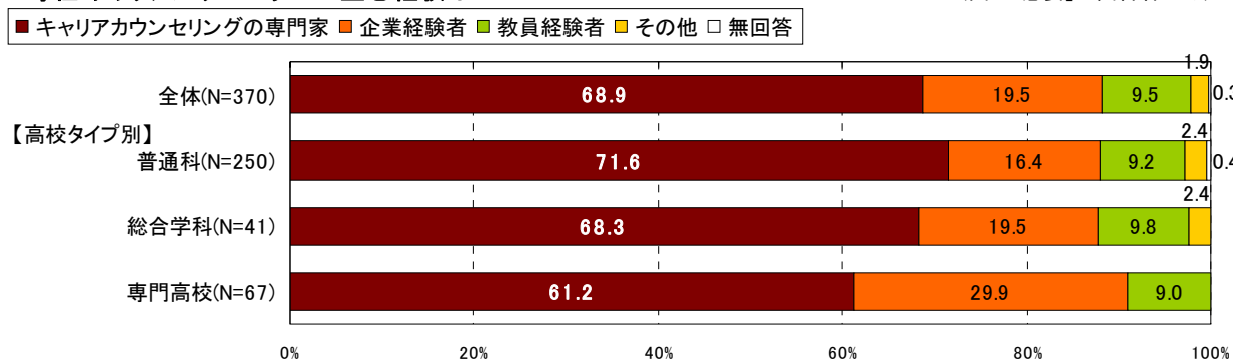
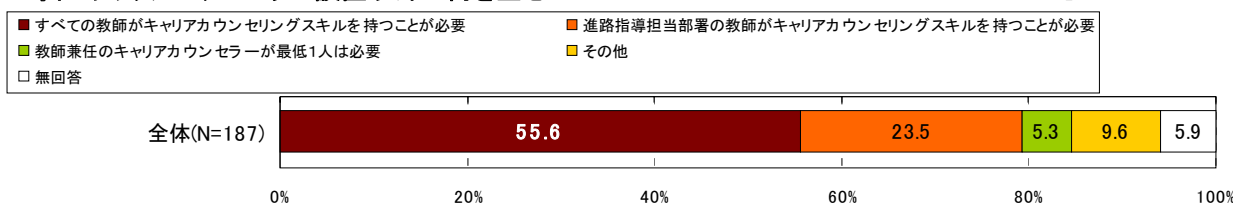


図22 専任キャリアカウンセラー設置以外に何を望むか

(図20「不要」の回答者のみ)



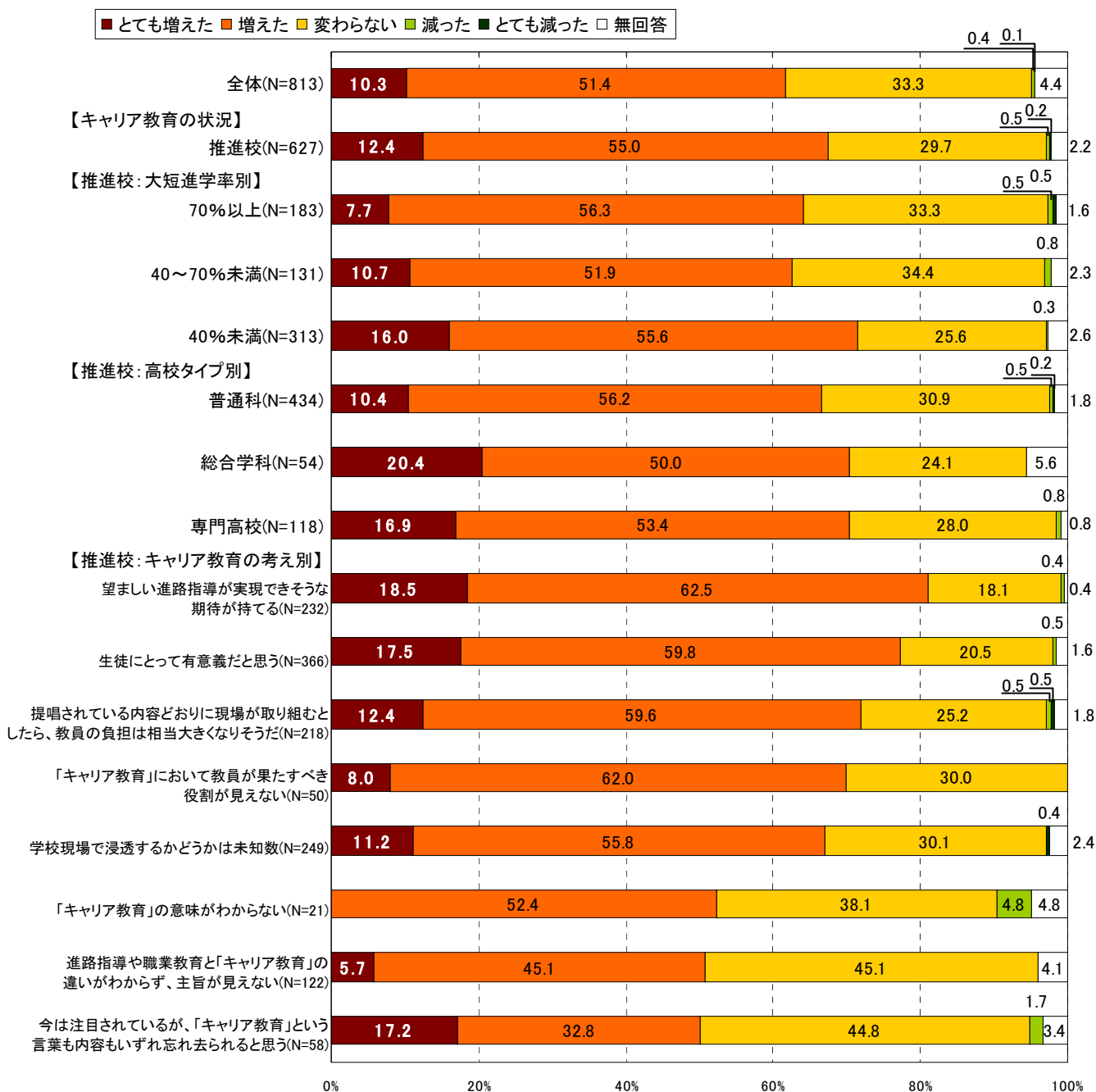
V 教師のキャリア観

20. 教師自身のキャリアを考える機会

- 「自身のキャリアを考える機会がとても増えた・増えた」は全体の約6割、推進校の約7割
- キャリア教育肯定派は自身のキャリアも考えている

キャリア教育を推進していくなかで、自分自身のキャリアについて考える機会が増えたかどうかをたずねたところ、全体では「とても増えた」「増えた」の合計が62%だった（図23）。これをキャリア教育推進校（図15「無回答」以外）に限定してみると、「とても増えた」「増えた」の合計は67%と7割近くにのぼる。キャリア教育は推進者である教師自身のキャリア観に少なからず影響を及ぼしていると考えられる。とくに大短進学率[40%未満]や総合学科で影響の大きさがうかがえる。また、キャリア教育に対する考え（図17参照）ともクロス集計してみた。キャリア教育を「望ましい進路指導ができそう」「生徒にとって有意義」と肯定的に考える層で「(とても) 増えた」の割合が大きく、およそ8割にのぼっている。

図23 キャリアについて考える機会は増えたか



21. 教師自身のキャリアについて考える内容

- 「力量不足について」が約6割、「今後のキャリアデザイン」が約5割
- 身につけたい力は「カウンセリング力」がトップで35%

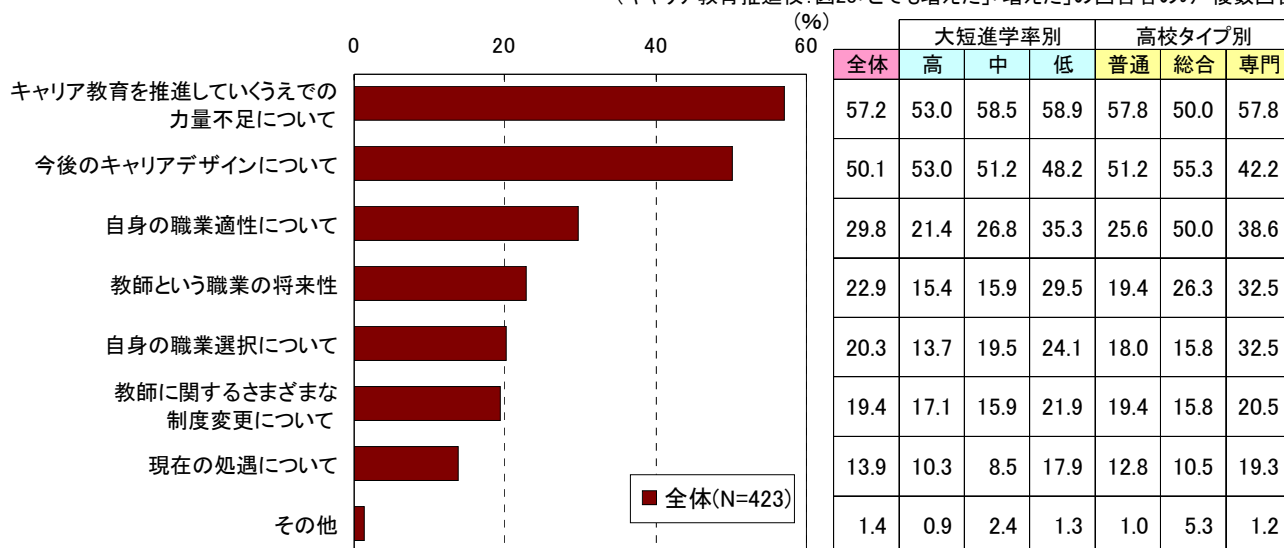
キャリア教育推進校で自分自身のキャリアについて考える機会が「(とても)増えた」と回答した人(図23参照)は、具体的にどのようなことを考えるようになったのだろうか(図24)。最も多かったのは「キャリア教育を推進していくうえでの力量不足」で57%、次は「今後のキャリアデザイン」50%だった。

大短進学率別に見ても、全ての層で「力量不足」と「今後のキャリアデザイン」が上位となっている。それ以外の「自身の職業適性」や「教師という職業の将来性」などは進学率[40%未満]での多さが目立つ。

力量不足を感じる教師が6割いたが、身につけたい力を選択肢から3つまで選んでもらったところ、「カウンセリング力」35%、「コーチング力」33%といった生徒や他の教師とのコミュニケーションにおけるスキルが多くあがった(図25)。

図24 キャリアについてどのようなことを考えるか

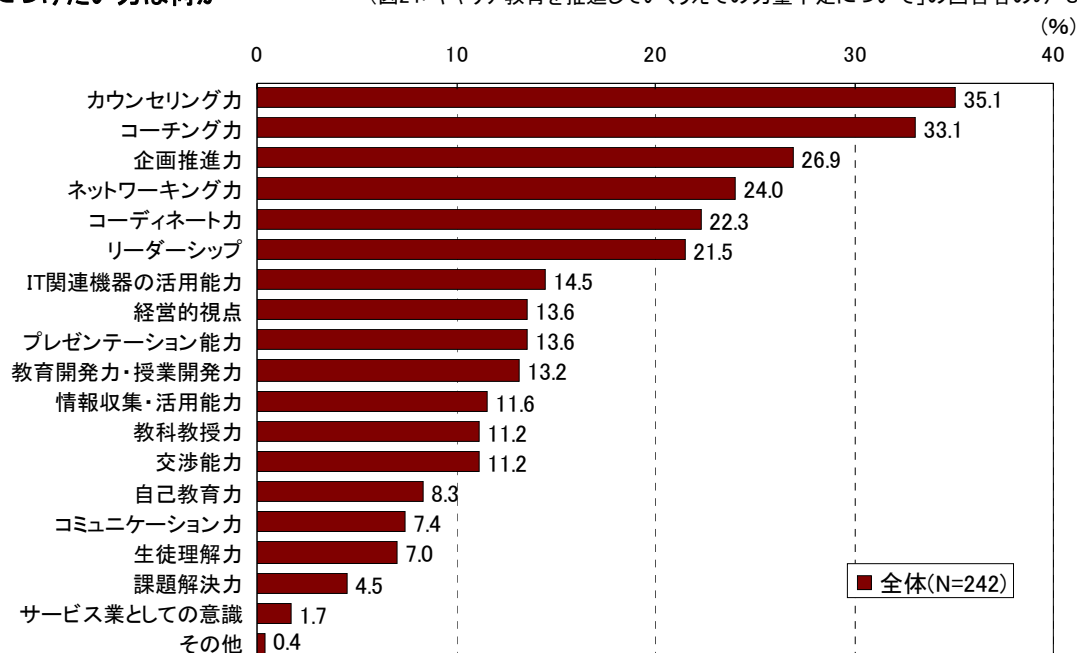
(キャリア教育推進校:図23「とても増えた」「増えた」の回答者のみ・複数回答)



※【大短進学率別】70%以上=高(N=117)、40~70%未満=中(N=82)、40%未満=低(N=224)
【高校タイプ別】普通科(N=289)、総合学科(N=38)、専門高校(N=83)

図25 身につけたい力は何か

(図24「キャリア教育を推進していくうえでの力量不足について」の回答者のみ・3つまで回答)



■負担の増大、処遇の悪化に不満が噴出

最後に、自分自身のキャリアや教師という職業について思うことを自由に書いてもらった(フリーコメント⑦)。

まず目立ったのが「我々が教師になった頃には考えられなかったような問題が出てきて大変」など、増大する負担への悲鳴だ。それにもかかわらず「給与は下がるばかり」という処遇や、「昨今の制度変更」に苛立ち」という制度面への不満も噴出した。「学校教育の困難さに対する社会の無理解」といった社会評価も、教師の意欲を萎えさせる一因になっている。また、「教育現場がどんどん社会とかけ離れているような感じがする」「どのような教育をすることが幸福につながるのか先が見えない」など不安の声も多い。

一方で、「今の生徒には今できる精一杯のことをしてあげたい」「生徒に必要な学力や社会人としての常識などを地道に指導していきたい」と、目の前の生徒に意識を集中させている教師もいる。「進路、キャリア教育の深化を目指したい」など、レベルアップを目指す姿も見られた。

フリーコメント⑦ 自身のキャリアについてどのように考えているか

■負担が増大するばかり■

○我々が教師になった頃には考えられなかったような問題が出てきて大変である。教師に対する社会的信用度の低下、学校安全対策、個人情報保護法対策、IT化、生徒や保護者の質の変化…など(関東・甲信越/普通科)

○私自身も含め「自分のことで精一杯」という者が多く、本来なされるべき教育が行われなくなるのではないかと不安(関東・甲信越/その他)

○日々の業務に追われて自分の職業観を再考する余裕がない(北海道/その他)

○教育の現場では学校外から様々なことが要求され、多忙になってきています。日常の業務に追われ、自発的に研鑽を積む意欲や意識を持ちにくい状況です(九州/普通科)

○選択肢があまりにも多くなか、家庭環境が悪化し将来を考えようとしていない・考えられない生徒に対して、学校がどこまで責任を背負うのか(関東・甲信越/普通科)

■処遇・制度に憤り■

○どんどん仕事量が増加している状況で、健康面の心配が増して家で会話時間がほとんどないのに、給与は下がるばかり(関西/普通科)

○やりがいのある職業ではあると思うが、実績に対する評価、業務分担が不公平すぎる。能力、実績給制にして、やる気のある方を正当に評価して欲しい(東海・北陸/専門高校)

○教師は何を行うことで報酬を得るかが明確でなく、現在の教師はスーパーマン化している。すべてを行える教師がいても給与は変わらず、行う意欲が起きない(東海・北陸/総合学科)

○行政>教育現場という感じがする現在、教師という職業の魅力も少なくなってきた(関西/普通科)

○教員免許更新制度などで日々研鑽を積んでいかなければならないが、ますます多忙化するなか更新に耐えられるか(東海・北陸/普通科)

○年々、待遇が悪化し、現場の士気が低下。私自身は仕事にやりがいと誇りを持ってやっていますが、昨今の制度変更には苛立ちを覚えています(北海道/普通科)

■社会評価に意欲が減退■

○学校教育の困難さに対する社会の無理解、教育へのバッシング等による、現場の意志力の低下が一番の問題である。自身もやる気を失いつつある(九州/専門高校)

○いじめ問題、一部の教師の社会問題がマスコミでクローズアップされることで、自らの生活を犠牲にしてまで頑張っている教師まで信頼を失いつつあり大変残念(関東・甲信越/普通科)

○子どもを取り巻くさまざまな困難は何よりも社会状況の変化に起因するところが多く、国や地方の方策として解決、改善されなければならぬ点が多い。そうした点を抜きにして教育現場の努力のみ強調されているようで疑問に思う(東海・北陸/専門高校)

■力量不足に不安感■

○社会情勢の変化が速い現代にあって、未知の時代を生きていく子ども達に求められる力を考えて教育していくことに自身の力量不足から不安を感じる(東海・北陸/普通科)

○今の社会の要求に応えられているのか不安。教育現場がどんどん社会とかけ離れているような感じがする(東北/専門高校)

○「進路指導は出口指導ではない」と言い続けてきましたが、進路部内の意識さえ十分に改革できていません。「キャリア教育」の全校への浸透、道のりの遠さばかりが感じられます(九州/専門高校)

■教師・社会の“先”が見えない■

○現在のキャリアと将来の人生設計について不安を解消できない面もあるので、逃げずに現実を直視していきたい(九州/普通科)

○学校の存在意義や価値といったものや、教員の立場も周囲が変化しているにもかかわらず、具体的にどう対応していったらよいかが見えてこないのが不安(東海・北陸/普通科)

○社会の動きが激しすぎるため、どのような教育が幸福につながるのか、先が見えないまま仕事を行うことに不安を感じる(北海道/普通科)

■教師も変革が必要■

○民間企業に勤務している者と比べ、サービス精神に欠ける。与えられた仕事だけしたらよいと思っている教員も多い(関西/普通科)

○計画性がなく世の中の動きに疎くてもやれてしまうのが教師の仕事だ。そんな教師が多いことに、進路指導をしていると気づきます(関西/普通科)

○教育活動そのものが、全体的な指導から個別指導的なものに移行していくと思う。個々の教師の力量がより問われるとともに、計画・立案者としてのリーダーの存在が不可欠となる(関東・甲信越/普通科)

■目の前にいる生徒のために■

○工業としてのキャリア教育のなかで、その年の生徒に合った処方箋を開発中です。一番大切なのは生徒はその時しか教育を受けるチャンスがないこと。今の生徒には今できる精一杯のことをしてあげたいです(東海・北陸/専門高校)

○社会が変わっていくにつれて学校に求められるものが変わっていくことは仕方がない。キャリア教育のような「はやり言葉」に踊らされることなく、生徒に必要な学力や社会人としての常識などを地道に指導していくことが大切だと思う(中・四国/普通科)

■レベルアップに向けて■

○教師は専門の教授力はもちろん、もうひとつ何か得意分野をもつ必要がある。私自身は進路、キャリア教育の深化を目指したいと思っている(中・四国/専門高校)

○教師としてのスキルを磨かないと、生徒も保護者もついてこない(九州県/普通科)

○現在、通信で「生涯教育」をテーマとする大学院に在学中である。そのきっかけは生徒に対するキャリアガイダンスの最中に得た(東海・北陸/総合学科)

○教師として37年間やってきましたが、現在でもなお力不足であり、勉強しています。今後も続くことでしょう(関東・甲信越/普通科)

▼本調査に関するお問い合わせは、下記までお願いします▼

株式会社リクルート
キャリアガイダンス編集長 角田浩子
TEL03-5501-7372
e-mail:career@r.recruit.co.jp

※出版・印刷物等へデータ転載する際には、“(株)リクルート調べ”と明記していただきますようお願い申し上げます。

※この調査結果については、キャリア教育専門誌『キャリアガイダンス No.16』（リクルート）にも掲載しています。